

仲 島 遺 跡 XII

福岡県大野城市仲畑所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第71集

2006

大野 **九州国立博物館** 委員会



200094373

仲 島 遺 跡 XII

福岡県大野城市仲畑所在遺跡調査報告

大野城市文化財調査報告書

第71集

2006

大野城市教育委員会

序

仲島遺跡は、本市の仲畑地区から福岡市にまたがって広がる遺跡で、昭和53年にはじめて見つかりました。本市教育委員会では、翌昭和54年から発掘調査を実施し、これまでに「貨布」「人面墨書土器」「移動式竈」など、考古学上話題となった遺物が出土しています。

発掘調査によって、仲島遺跡は弥生時代から鎌倉時代まで続いたことが明らかになりました。近年は、奈良時代における本遺跡の性格が注目されています。

今回は、弥生時代から古墳時代までについての報告ですが、特に弥生時代の墓地は、同時代における本遺跡の性格を考える上で良き資料となるでしょう。

最後になりましたが、発掘調査に際してご理解ご協力をいただいた土地所有者をはじめとする地元の方々、整理作業において多くのご指導を賜りました関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 古賀 宮太

例 言

- 1 本書は大野城市教育委員会が国・県費補助を受けて実施した、大野城市仲畑所在の仲島遺跡第12次、13次発掘調査の報告である。
- 2 遺構の分類記号は、S B - 竪穴住居跡・掘立柱建物跡、S J - 甕棺墓、S P - 土壙墓・木棺墓、S E - 井戸、S D - 溝、S X - 性格不明な不整形の落ち込み、である。
- 3 遺物写真は岡紀久夫（埋蔵文化財写真研究会会員）が撮影した。
- 4 遺物の実測は、明永美和、江上正高、境聡子、竹下里織、西村晴香、丸尾博恵、元吉知子が行った。
- 5 製図は、遺物の一部を渡部美香が、その他の遺物と遺構は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 6 遺物番号は通し番号とし、図版と挿図の番号を統一した。
- 7 第1図で使用した地図は、国土地理院発行の地形図「福岡南部」を使用したものである。
- 8 本書の執筆、編集は徳本洋一が担当した。

本文目次

I はじめに	1
II 調査の結果	4
1 ㊦ 2区	4
(1) 調査の概要	4
(2) 検出遺構と遺物	4
2 ㊦ 4区	29
(1) 調査の概要	29
(2) 検出遺構と遺物	29
III まとめ	45

図版目次

図版1	(1) ㊦ 2区全景 (南から)
	(2) ㊦ 2区全景 (東から)
図版2	(1) ㊦ 4区全景 (南から)
	(2) ㊦ 4区全景 (西から)
図版3	(1) ㊦ 2区 SBO1
	(2) ㊦ 2区 SJO1
	(3) ㊦ 2区 SJO2
図版4	(1) ㊦ 2区 SPO1
	(2) ㊦ 2区 SPO2
	(3) ㊦ 2区 SPO3
図版5	(1) ㊦ 2区 SPO4
	(2) ㊦ 4区 SBO1、SBO2、SBO5
	(3) ㊦ 4区 SBO1
図版6	(1) ㊦ 4区 SBO3
	(2) ㊦ 4区 SBO4
	(3) ㊦ 4区 SEO1
図版7	(1) ㊦ 4区 SEO2
	(2) ㊦ 4区 SEO3

- 図版8 出土遺物①
図版9 出土遺物②
図版10 出土遺物③
図版11 出土遺物④

挿 図 目 次

- 第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)
第2図 地区割図と㊦2区、㊦4区的位置 (網掛け部分 1/5000)
第3図 ㊦2区 遺構配置図 (1/100)
第4図 ㊦2区 SBO1実測図 (1/50)
第5図 ㊦2区 SBO1出土遺物実測図 (1/3)
第6図 ㊦2区 SJO1、SJO2実測図 (1/30)
第7図 ㊦2区 SJO1上甕・下甕実測図 (1/8)
第8図 ㊦2区 SJO2上甕・下甕実測図 (1/8)
第9図 ㊦2区 SPO1～SPO4実測図 (1/30)
第10図 ㊦2区 SDO1上層出土遺物実測図① (1/3)
第11図 ㊦2区 SDO1上層出土遺物実測図② (1/3、1/4)
第12図 ㊦2区 SDO1上層出土遺物実測図③ (1/3)
第13図 ㊦2区 SDO1下層出土遺物実測図 (1/3、1/4)
第14図 ㊦2区 SDO4出土遺物実測図① (1/3)
第15図 ㊦2区 SDO4出土遺物実測図② (1/3)
第16図 ㊦2区 SDO5出土遺物実測図 (1/3)
第17図 ㊦2区 SD13出土遺物実測図① (1/3)
第18図 ㊦2区 SD13出土遺物実測図② (1/3)
第19図 ㊦2区 SD13出土遺物実測図③ (1/3)
第20図 ㊦2区 SD13出土遺物実測図④ (1/4)
第21図 ㊦2区 SD13出土遺物実測図⑤ (1/4)
第22図 ㊦2区 SXO1実測図 (1/50)
第23図 ㊦2区 SXO2、SXO3実測図 (1/50)
第24図 ㊦2区 SXO1、SXO2、SXO3出土遺物実測図 (1/3)
第25図 ㊦4区 遺構配置図 (1/100)
第26図 ㊦4区 SBO1実測図 (1/50)
第27図 ㊦4区 SBO2実測図 (1/50)
第28図 ㊦4区 SBO3実測図 (1/50)

- 第29図 ㊦4区 SBO4実測図 (1/50)
- 第30図 ㊦4区 SBO5実測図 (1/60)
- 第31図 ㊦4区 SBO1、SBO2、SBO3、SBO4出土遺物実測図 (1/3)
- 第32図 ㊦4区 SEO1、SEO2、SEO3実測図 (1/30)
- 第33図 ㊦4区 SEO1、SEO2、SEO3出土遺物実測図 (1/3)
- 第34図 ㊦4区 SDO1出土遺物実測図 (1/3)
- 第35図 ㊦4区 SDO2出土遺物実測図 (1/3)
- 第36図 ㊦4区 SDO3出土遺物実測図 (1/3)
- 第37図 ㊦4区 SXO1実測図 (1/50)
- 第38図 ㊦4区 SXO2実測図 (1/50)
- 第39図 ㊦4区 SXO1出土遺物実測図 (1/3)

I はじめに

1 調査の経緯

仲島遺跡は、1978年に福岡市が実施した発掘調査によってはじめて確認された。本遺跡は、東西幅が約120m、南北長が約600mの範囲に、大野城市と福岡市にまたがって広がると考えられている（第1図）。近年は、本遺跡から西に約400mに位置する、福岡市の井相田C遺跡との関連も注目されている。大野城市においては、1979年より国・県費補助を受けた発掘調査を継続的に実施して今日に至っている。

発掘調査の成果によって、本遺跡は弥生時代中期前半から古墳時代、奈良時代、やや間があいて鎌倉時代にまで至る複合遺跡であることがわかっている。過去の調査での注目される遺物・遺構を列挙すると、貨布（王莽銭）、銅鏃、後漢鏡（破片）、青銅製鋤先、銅矛鑄型、子持勾玉・刀子など滑石製模造品、人面墨書土器、移動式竈、下駄、木組みの井戸（奈良時代）、漁獲施設（築・鎌倉時代）などがある。

本書で報告するのは、1992年度の調査箇所（大野城市仲畑二丁目193番）と1993年度の調査箇所（大野城市仲畑二丁目194番1、194番2）である。調査開始当初から使用している地区割りに従うと㊦2区と㊦4区に相当する（第2図）。

これまでに調査した地点と、そこでの主な遺物・遺構については、下記のように調査報告書が刊行されている。

- (1)「仲島遺跡Ⅰ」（大野城市文化財調査報告書第3集） 1980年：仲畑二丁目174番（㊦ 3区）・同175番（㊦ 9区）・同188番（㊦ 4区）・同191番1（㊦ 5区）・同190番（㊦ 10区）
- (2)「仲島遺跡Ⅱ」（大野城市文化財調査報告書第6集） 1981年：仲畑二丁目181番（㊦ 6区＝人面墨書土器）・同192番（㊦ 1区）・仲畑四丁目51番（㊦ 1区）
- (3)「仲島遺跡Ⅲ」（大野城市文化財調査報告書第10集） 1983年：仲畑二丁目188番（㊦ 4区＝貨布、青銅製鋤先）・同189番（㊦ 9区＝銅矛鑄型）
- (4)「仲島遺跡Ⅳ」（大野城市文化財調査報告書第12集） 1984年：仲畑四丁目51番（㊦ 1区＝築）・同52番（㊦ 5区）・同53番（㊦ 6区） *付編として人面墨書土器の詳説
- (5)「仲島遺跡Ⅴ」（大野城市文化財調査報告書第17集） 1986年：仲畑二丁目183番（㊦ 1区、㊦ 2区＝井戸）
- (6)「仲島遺跡Ⅵ」（大野城市文化財調査報告書第20集） 1987年：仲畑二丁目179番（㊦ 11区＝滑石製模造品、下駄、井戸）
- (7)「仲島遺跡Ⅶ」（大野城市文化財調査報告書第24集） 1988年：仲畑二丁目180番（㊦ 12区＝井戸）・仲畑四丁目54番（㊦ 2区）
- (8)「仲島遺跡Ⅷ」（大野城市文化財調査報告書第24集） 1989年：仲畑二丁目185番（㊦ 7区＝銅鏃、後漢鏡片、滑石製模造品、井戸）・仲畑四丁目38番（㊦ 3区）
- (9)「仲島遺跡Ⅸ」（大野城市文化財調査報告書第31集） 1990年：仲畑四丁目55番（㊦ 7区）
- (10)「仲島遺跡Ⅹ」（大野城市文化財調査報告書第34集） 1992年：仲畑二丁目176番（㊦ 10区＝土師質移動式竈）
- (11)「仲島遺跡Ⅺ」（大野城市文化財調査報告書第37集） 1993年：仲畑二丁目171番（㊦ 7区＝井戸、土製模造鏡） *付編として土製勾玉、土鈴

2 調査の体制

発掘調査の体制は以下のとおりである。

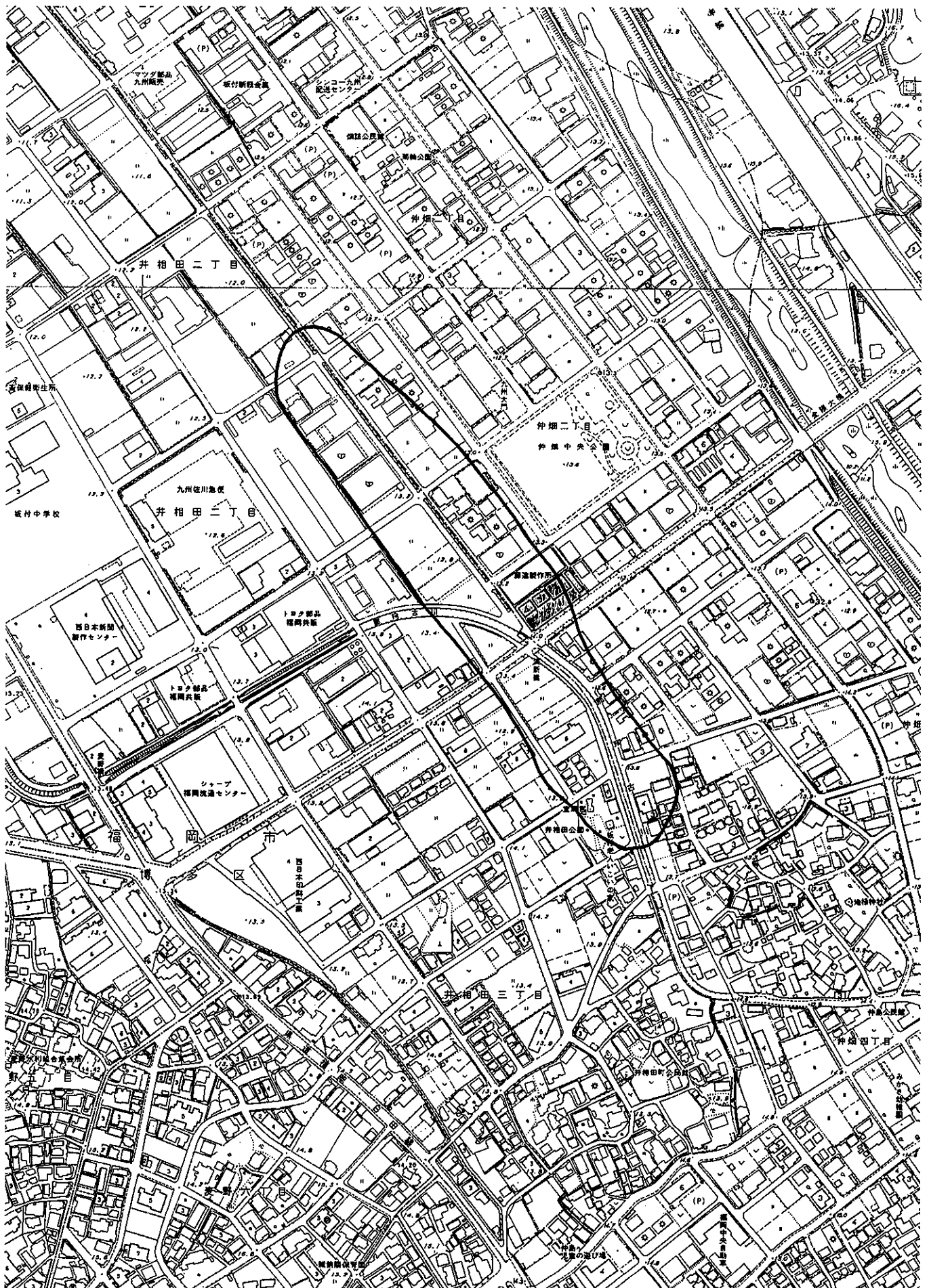
大野城市教育委員会	教育長	久野英彦
	教育部長	後藤幹生
	社会教育課 課長	關 隆昭

社会教育課	課長補佐	白水岩人
同	主査	舟山良一
同	主任主事	浦山敏弘
同	主任技師	向 直也 (平成3年度調査担当)
同	主任技師	徳本洋一 (平成4年度調査担当)
同	整理嘱託	秀嶋和子



1. 仲島遺跡 2. 金隈遺跡 3. 持田ヶ浦古墳群 4. 御陵古墳群 5. 塚口遺跡 6. 御陵前の椽遺跡
7. ヒケシマ遺跡 8. 中・寺尾遺跡 9. 板付・高畑遺跡群 10. 諸岡遺跡群
11. 麦野A遺跡 12. 麦野C遺跡 13. 南八幡遺跡 14. 須玖岡本遺跡群 15. 御笠の森遺跡
16. 雑餉隈遺跡(福岡市) 17. 雑餉隈遺跡(大野城市) 18. 村下遺跡 19. 石勺遺跡
20. 駿河遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)



第2図 地区割図と㉟2区、㉟4区の位置（網掛け部分 1/5000）

Ⅱ 調査の結果

1 ㉟2区

(1) 調査の概要

㉟2区は仲畑二丁目193番にあたる。発掘調査対象地の面積は987m²であったが、実際に掘削を行ったのは約800m²である。

遺構は調査地の西側約半分でしか検出されず、残りは全域が灰白色の砂の面であった。この砂は調査地の東側を流れる御笠川の氾濫によってもたらされたもので、本来遺構があった部分もこの砂によって破壊されたことがわかった。また、検出された遺構の一部も、この砂によって破壊されていた。発掘調査を行った時点では仲島遺跡の東端を確認したことになるが、御笠川の氾濫によって破壊されるまでは、砂層の部分にも遺構があったのである。しかし、それがどの程度まで広がっていたのかを知ることはできなかった。

遺構面は黒色土である。遺構面までの深さは南側に行くほど深くなっており、南端で地表（耕作土の面）から約1.1m、北端では約0.6mである。また、遺構面の直上には黒褐色の遺物包含層が堆積していた。遺物包含層の厚さも南側ほど厚く、南端では約0.6m、北端では約0.3m～0.4mの堆積があった。遺物包含層の堆積は全面に見られるのではなく、東端はSDO4とSD13の西側の壁の部分までである。大雑把に言えば、遺構のない部分には包含層もないことになる。

検出した主な遺構は、竪穴住居（SB）1、甕棺墓（SJ）2、土壙墓（SP）1、木棺墓（SP）3、溝（SD）6、性格不明な不整形の落ち込み（SX）3である。

(2) 検出遺構と遺物

①竪穴住居

SB01（図版3、第4図）

調査区の西辺近くのほぼ中央部で検出された。4m×4.4mのややゆがんだ方形のプランを持つ。SDO1とSDO2と切り合い関係にあり、新旧関係は、両者よりもSB01の方が新しい。壁高は最も残りの良い部分で約7cmであった。床面には直径約50cm、深さ約40cm～45cmの柱穴が4個見られた。柱は少なくとも2回立て替えられたと考えられ、3個の柱穴の底面には、柱を据えた円形のくぼみがそれぞれ2つずつ残っていた。北東側の壁中央のピットの埋土の中には、焼土と炭が混じっており、炉と判断される。

出土遺物（第5図）

弥生土器

甕（1～4）

1は図上復元で口径24.6cmを測る。口縁部の断面形はやや張り出す逆L字形で、口縁下には断面三角形の突帯を1条貼りつける。内面に指オサエの痕跡が見られる。2～4は胴部下半から底部。2は底径6.7cmで、内面に指オサエの痕跡、外面にわずかにハケ目が残る。3は復元底径9.8cm。内外面にハケ目が残るが、外面はわずかである。4は復元底径13.2cm。外面にわずかにハケ目が残る。



第3図 ㊦2区 遺構配置図 (1/100)

②甕棺墓

SJO1 (図版3、第6図)

SBO1の約50cm北側で検出された、成人用の甕棺墓である。木棺墓SPO4と切り合い関係にある。新旧関係は、SJO1の方が新しい。主軸方位はN66° E。墓壙規模は、長軸×短軸で152cm×79cmであるが、かなり削平されている。甕を2つ使っており、口は普通に合わせられている。棺の埋置はほぼ水平であるが、西側の棺に水抜きのためと考えられる穿孔が見られることから、西側の棺を下甕とした。

出土遺物 (第7図)

弥生土器

甕 (5・6)

5は上甕。全体の約半分を欠く。図上復元で口径55cm、胴部最大径61cmを測る。口縁部は内傾するT字形で、胴部のやや上位に断面三角形の突帯を1条貼りつける。胴部外面に黒斑が見られる。6は下甕。やはり約半分しか残存しない。図上復元で口径54cm、器高71.6cm、胴部最大径56.8cm、底径10cmを測る。口縁部の断面形は未発達なT字形で肉厚である。胴部の中位に断面三角形の突帯を1条貼りつける。胴部外面と底部内面に黒斑が見られる。穿孔は焼成後、内側から行なっている。

SJO2 (図版3、第6図)

SD13より東側で検出された、小児用の甕棺墓である。主軸方向は、N62° W。上甕の大部分は、御笠川の氾濫によって墓壙もろとも破壊されている。下甕も同時にかかなり破壊されているが、上甕ほどではない。したがって、墓壙規模は長軸が不明、短軸が52cmである。甕を2つ使っており、口の合わせ方は上甕の中に下甕が入る覆い口である。

出土遺物 (第8図)

弥生土器

甕 (7・8)

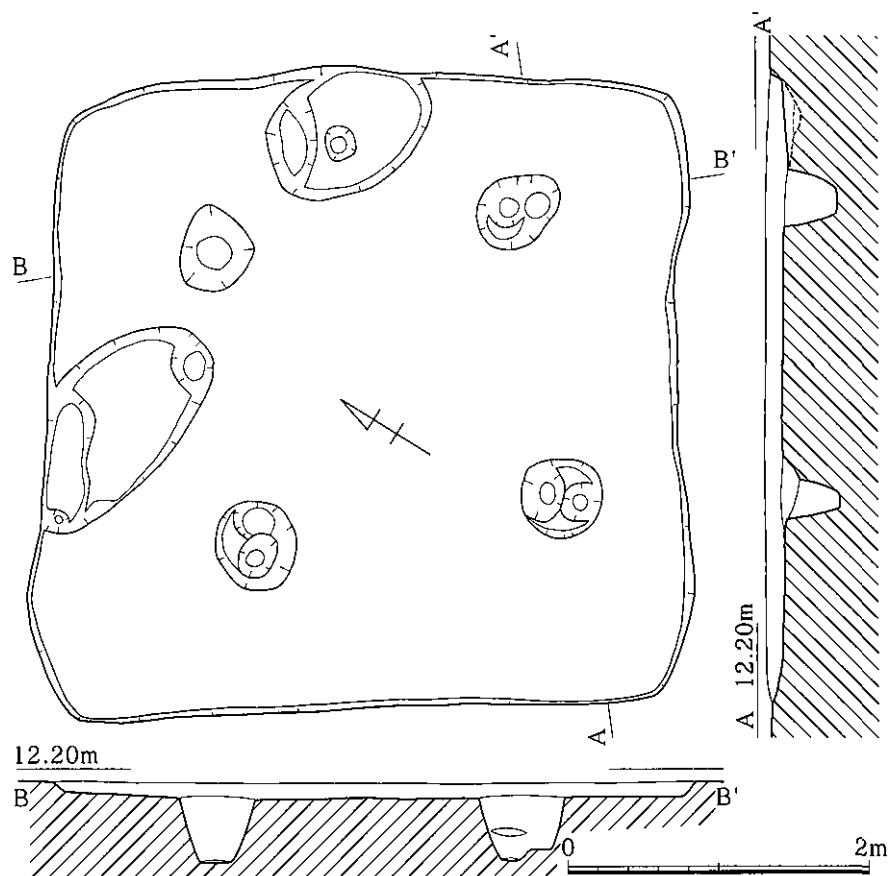
7は上甕。全体の約5分の3を欠く。図上復元で口径41cm、胴部最大径38.5cmを測る。口縁部の断面はわずかに内傾する逆L字形である。胴部上位に断面三角形の突帯を1条貼りつける。8は下甕。全体の約2分の1を欠く。図上復元で口径35.5cm、器高41.2cm、胴部最大径33.3cm、底径8cmを測る。口縁部の断面はやや内側に突出する逆L字形である。胴部上位に断面三角形の突帯を1条貼りつける。外面に煤が付着しているが、日常容器を転用したものか。

③木棺墓

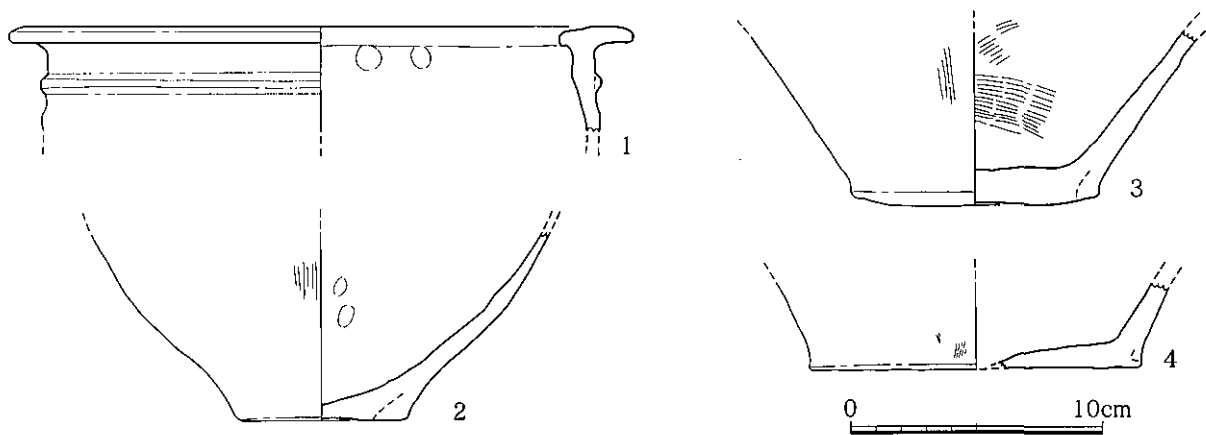
3基の木棺墓は、SBO1の北側で集中的に検出された。いずれも削平による上部の破壊が激しく、掘り方が素掘りであるか二段掘りであるかはわからなかった。主軸方向がほぼ一致し、列埋葬の形をとっていた。

SPO1 (図版4、第9図)

木棺墓SPO1は、土壙墓SPO2と切り合い関係にある。新旧関係は、SPO1の方が古い。主軸方向は、N37° W。SPO2によって破壊されている部分を補って考えると、墓壙の規模は、



第4図 ⑤2区 SBO1実測図 (1/50)



第5図 ⑤2区 SBO1出土遺物実測図 (1/3)

長さ×幅×深さで80cm×50cm×10cmである。このように小型であることから、小児を埋葬したものと考えられる。組合せ式の木棺墓であるが、側板を立てる掘り込みは確認できなかった。

出土遺物

出土遺物はなかった。

SPO3 (図版4、第9図)

木棺墓SPO3は、土壙墓SPO2と切り合い関係にある。新旧関係は、SPO3の方が古い。主軸方向はN36° W。墓壙の規模は、SPO2によって破壊されている部分を補って考えると、長

さ×幅×深さで210cm×90cm×10cmである。墓壇中央部に攪乱を受けている。組合せ式の木棺墓であるが、側板を立てる掘り込みは確認できなかった。

出土遺物

出土遺物はなかった。

SP04 (図版5、第9図)

木棺墓SP04は、甕棺墓SJO1と切り合い関係にある。新旧関係は、SP03の方が古い。主軸方向はN20°W。墓壇の規模は、SJO1によって破壊されている部分を補って考えると、長さ×幅×深さで165cm×45cm×25cmである。組合せ式の木棺墓であるが、側板と北側の小口板を立てる掘り込みは確認できなかった。

出土遺物

出土遺物はなかった。

④土壇墓

SP02 (図版4、第9図)

土壇墓SP02は、木棺墓SP01、SP03と切り合い関係にある。SP01、SP03よりもSP02の方が新しい。主軸方向は、N19°Eで、3基の木棺墓とは主軸方向が異なっている。墓壇の規模は、長さ×幅×深さで145cm×65cm×20cmである。

出土遺物

出土遺物はなかった。

⑤溝

SD01

溝SD01は、調査区西辺とほぼ平行して流れる形で検出された。南端は次第に浅くなり消失している。SD02、SB01、SX02と切り合い関係にある。新旧関係は、SB01、SX02より古く、SD02より新しい。幅は約2mと一定しており、深さは最も深い部分で約60cmを測る。明瞭な2段掘りで、底面は平坦である。埋土は上下の2層に分けることができ、出土遺物は上層の方が多く、両層の遺物に明らかな時期差はないものと思われる。

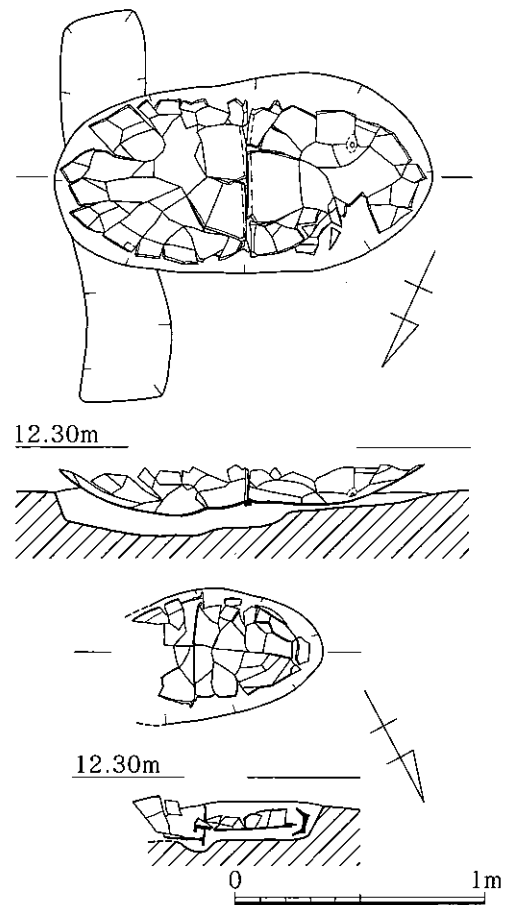
出土遺物 (第10図～第13図)

主に弥生土器が出土した。第10～12図が上層出土、第13図が下層出土の遺物である。

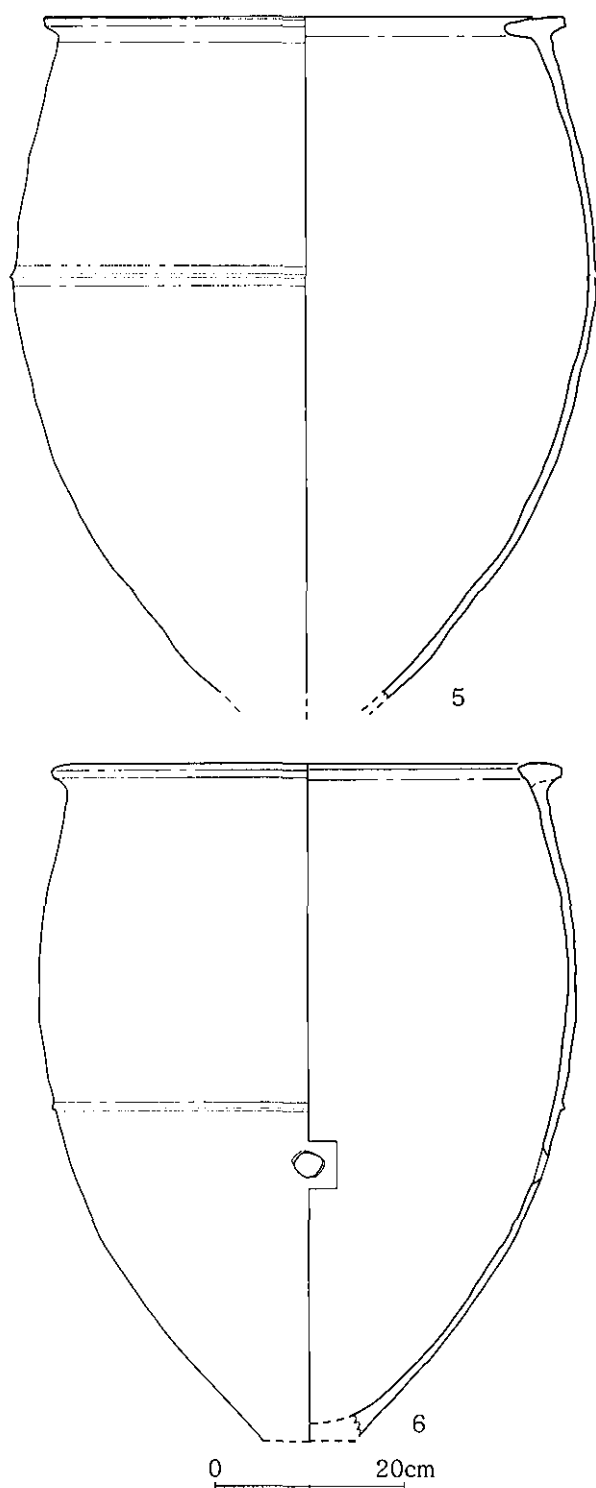
上層出土遺物

弥生土器

高杯 (9)



第6図 ⑤2区 SJO1、SJO2実測図 (1/30)



第7図 ㉟2区 SJO1上甕・下甕実測図 (1/8)

脚部を欠損する。復元口径8.1cm、残存高5.6cmを測る。胴部やや上位に突帯を1条貼りつける。外面に丹塗りの痕跡が見られる。

鉢 (10・11)

10はほぼ完形で全体の約2分の1を欠く。図上復元でハケの後ナデ。11は全体の約4分の3を欠く。図上復元で口径19.2cm、残存高7.5cmを測る。調整は風化がひどく、内外面とも不明。

蓋 (12)

全体の約2分の1を欠く。図上復元で天井部径6cm、残存高6cmを測る。外面にハケ目、内面に指でナデた痕跡が見られる。

器台 (13)

全体の約2分の1を欠く。図上復元で口径12.4cm、底径12.8cm、器高18.5cmを測る。調整は外面が縦横のハケ、内面が横ハケである。内面にへうによる刻みが見られる。

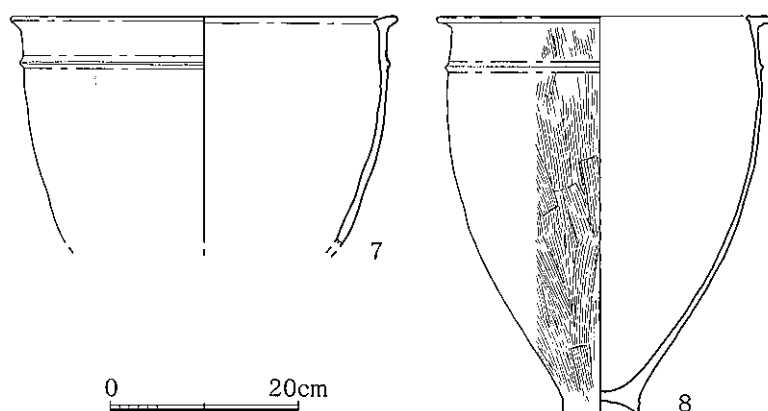
壺 (14~20)

14~19が口縁部片、20は胴部片である。いずれも図上復元した。14は復元口径12cm。口縁部に穿孔があり、部分的に丹塗りの痕跡が見られる。15は復元口径18.9cm、丹塗りの痕跡がかすかに残る。16は復元口径20.4cm。これも丹塗りの痕跡が見られる。17は復元口径23.8cm。丹塗りの痕跡がかすかに残る。18は復元口径30cm。風化がひどく調整は不明だが、内外面ともに煤が付着する。19は推定で復元口径約30cm。外面に丹塗りの痕跡が見られる。20は胴部突帯部分のみ残存する。これも外面に丹塗りが見られる。

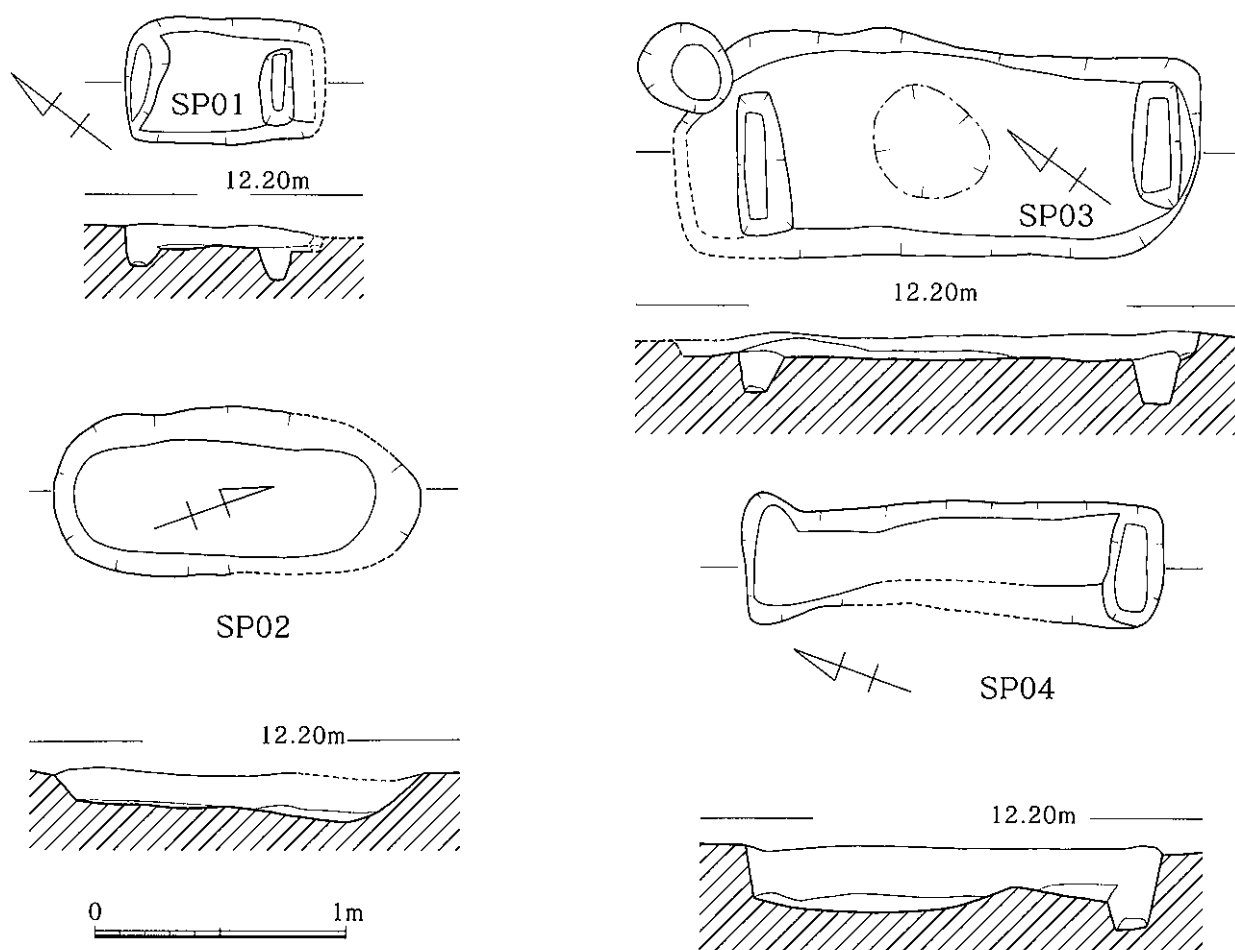
甕 (21・22)

21が口縁部片、22は口縁部から胴部の破片で、ともに図上復元した。21は復元口径24cm。調整は内外面とも縦ハケ。22は復元口径30.7cm。調整は口縁部横ナデ、胴部外面縦ハケである。

小壺 (23・24)



第8図 ㉟2区 SJO2上甕・下甕実測図 (1/8)

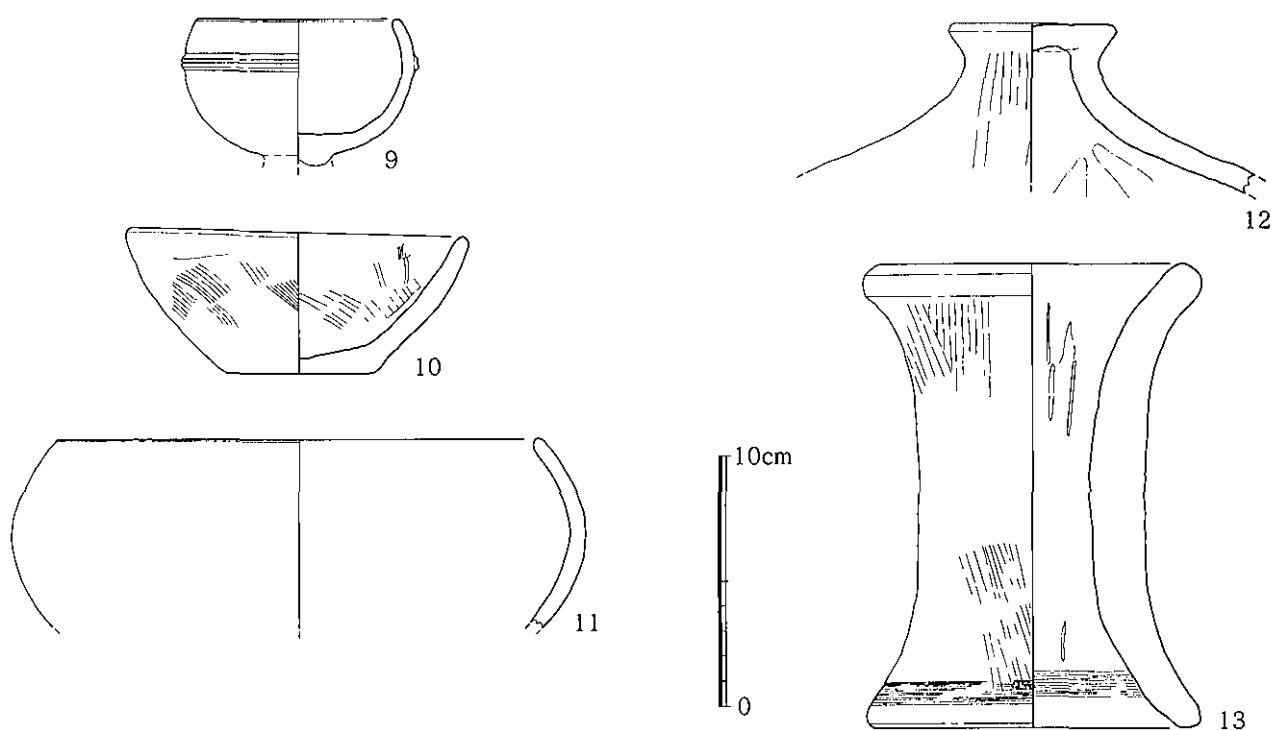


第9図 ㉟2区 SP01～SP04実測図 (1/30)

いずれも胴部上位以上を欠き、図上復元した。23は復元底径3.4cm、残存高6.4cm。風化がひどいが、内面に指で押さえた痕跡が見られる。24は復元底径3.4cm、残存高5.5cm。風化のため調整は不明。

底部 (25～42)

壺あるいは甕の底部である。すべて小破片を図上復元した。25は風化のため調整不明。26は内面を指オサエ、外面に黒斑が見られる。27は底部外面に黒斑。28は外面にわずかに丹塗りの痕跡



第10図 ⑤2区 SDO1上層出土遺物実測図① (1/3)

がある。29は外面縦ハケ。30は内面を指オサエ。31は内面が指オサエと斜めのハケ、外面が縦ハケ。32は内面を指オサエ、底部外面に黒斑。33は風化のため調整不明。34は外面縦ハケ、底部穿孔があり、底部内面に煤が付着する。35は内面指オサエ、外面縦ハケ。36は内外面指オサエ。37は内面指オサエ。38・39は内面指オサエ、外面縦ハケ。40は内面指オサエ。41は外面に斜めのハケ。42は外面縦ハケである。

下層出土遺物

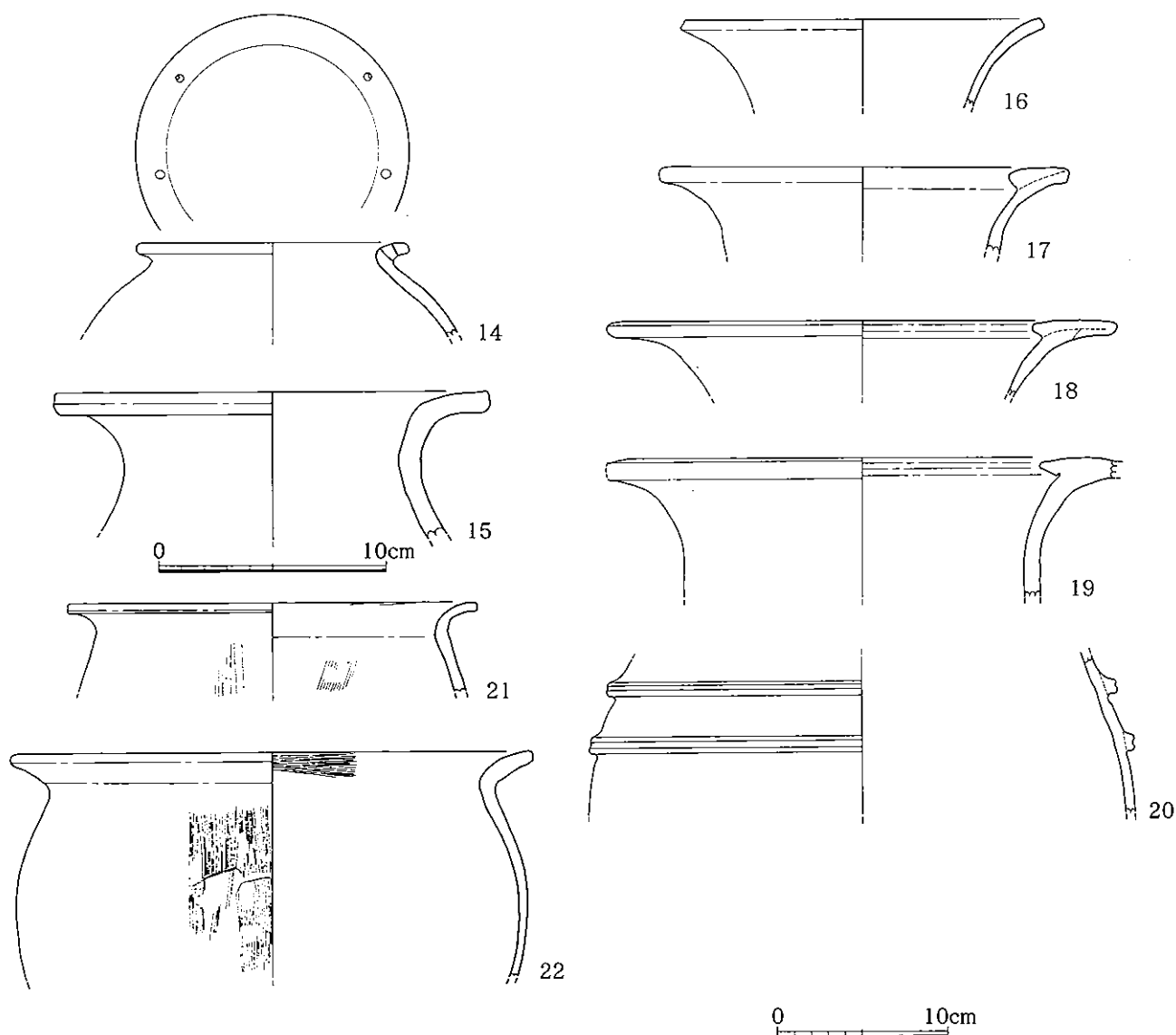
弥生土器

壺 (43)

口縁内部が小さく突出する。復元口径18cm。調整は外面が縦ハケ、口縁部が横ナデ。内外面ともに丹塗りの痕跡が残る。

甕 (44～52)

44は復元口径20cm。調整は外面が縦ハケ、口縁部が横ナデ。部分的に煤が付着する。45は復元口径21cm。調整は外面縦ハケ、口縁部横ナデ、内面は斜めのハケと指オサエ。外面にわずかに丹塗りの痕跡が残る。46は復元口径24.4cm。調整は外面縦ハケ、口縁部が横ナデ。47は復元口径29cm。調整は外面縦ハケ、口縁部が横ナデ、内面に斜めのハケ。外面の一部に煤が付着する。48は復元口径29.4cm。調整は外面縦ハケ、口縁部が横ナデ。49は復元口径31cm。調整は外面縦ハケ、口縁部外面横ナデ、口縁部内面横ハケ。50は復元口径31.6cm。調整は外面縦ハケ、口縁部が横ナデ。51は復元口径32.4cm。胎土が比較的精選されており、内外面ともに丹塗り。断面M字形の突帯を1条貼りつける。52は復元口径34.8cm。風化がひどいが、口縁部は横ナデの後、内面を指オサエしている。



第11図 ㊦2区 SDO1上層出土遺物実測図② (1/3、1/4)

SDO2

溝SDO2は調査区の北部を北西から南東方向に流れる形で検出された。SDO1、SD13、SB01と切り合い関係にある。新旧関係は、いずれの遺構よりもSDO2のほうが古い。また、SD13の東側では検出できなかった。幅が約50cm～90cm。深さは約6cmである。

出土遺物

弥生土器が少量あるが、図示できるものはない。

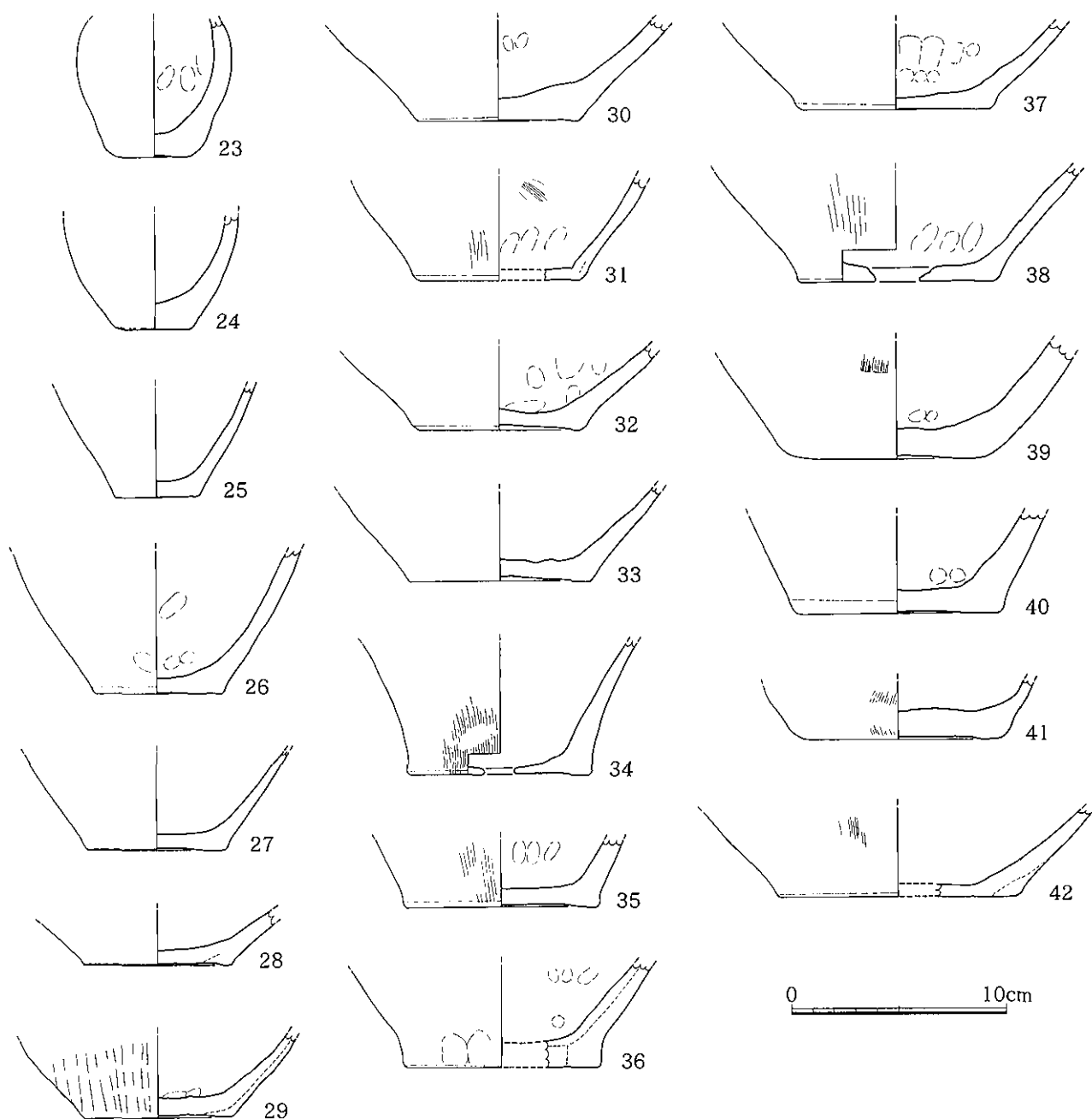
SDO3

溝SDO3は、SDO2の北側約7mをSDO2と並行するように流れるが、南東端は破壊されており検出できなかった。幅約50cm、深さ約40cmであった。

出土遺物

弥生土器が少量あるが、図示できるものはない。

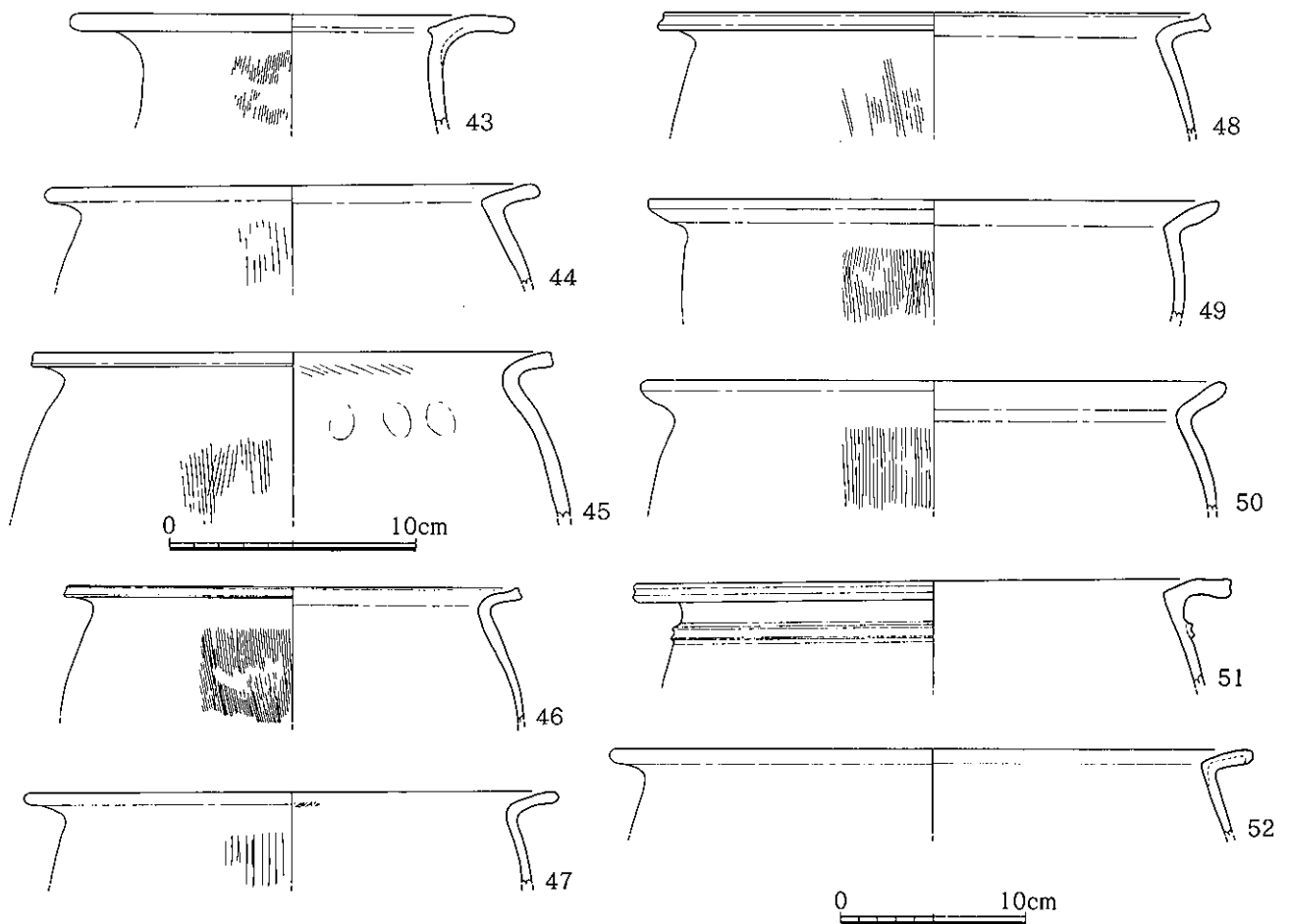
SDO4



第12図 ㊦2区 SDO1上層出土遺物実測図③ (1/3)

溝SDO4はSD13と切り合い関係にあり、SD13よりも新しいのだが、その新旧関係がわかったのは、かなり掘り下げを進めてからであった。幅2m～3m、深さ約1.5m～1.6mである。遺構検出の段階では、SDO4、SDO5、SD13と合わせて、非常に幅の広い溝としかつかめなかった。SDO5との新旧関係は不明である。東南端は2段掘りで、またこれより南側は御笠川の氾濫により完全に破壊されていた。なお、東側の壁と、西側の壁のうちSD13を切っている部分よりも南側は、上部に堆積した氾濫による砂層を厚さ約1.2m取り除かないと現れなかった。つまり、この部分の壁は底面に近い所しか確認されていない。

出土遺物 (第14図・第15図)



第13図 ㊦2区 SDO1下層出土遺物実測図 (1/3、1/4)

土師器

杯身 (53)

図上復元で口径14.2cm、器高4.4cmを測る。調整は内外面ともヘラミガキである。

高杯 (54)

脚端部を欠く。図上復元で口径13.3cmを測る。調整は杯部外面が横ナデとヘラミガキ、口縁部が横ナデ、内面がヘラミガキ。脚部外面はヘラミガキで、内面上位にシボリ痕が見られる。

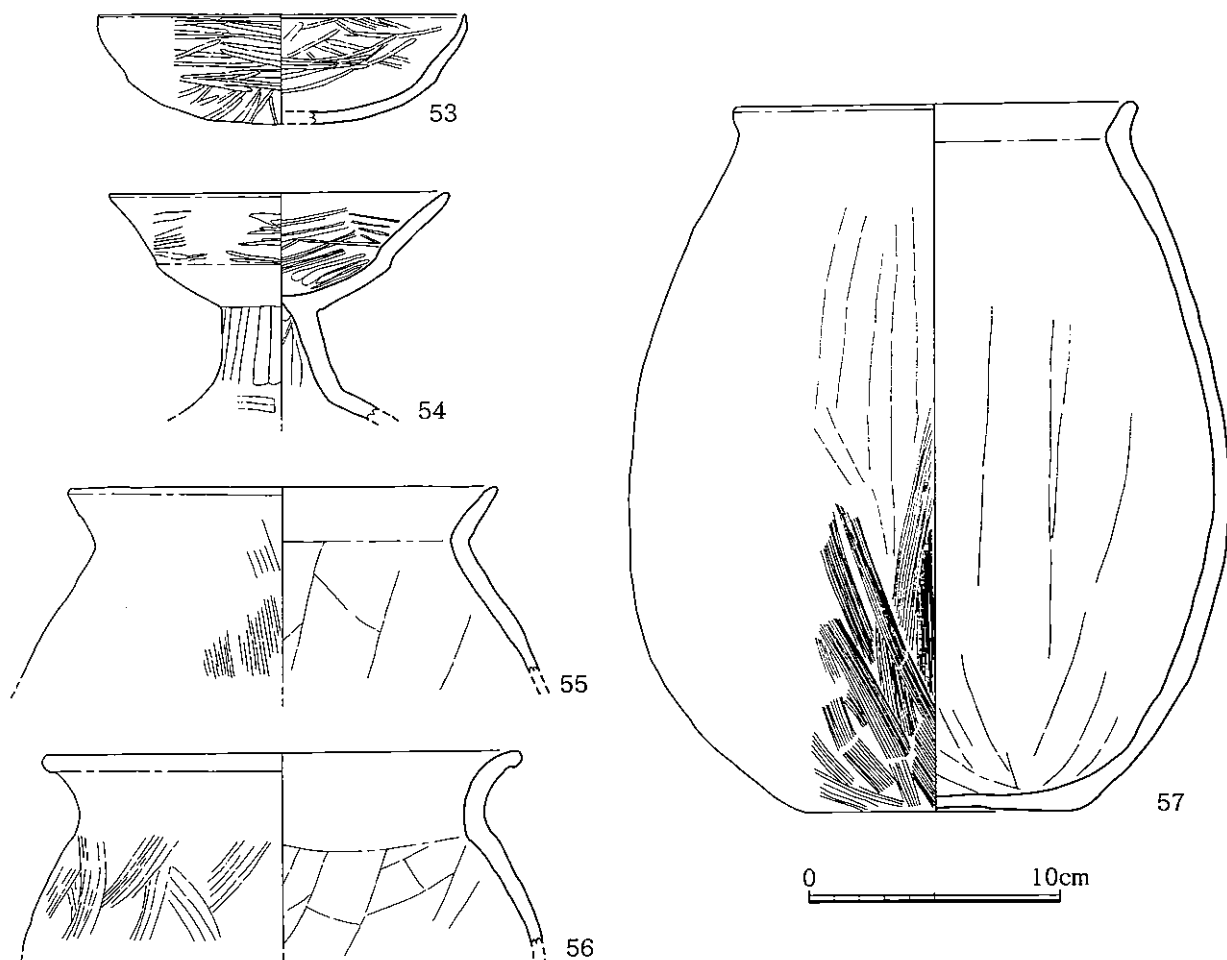
甕 (55~57)

55・56は口縁部付近のみの残存。55は復元口径17.1cmを測る。調整は胴部外面が斜めのハケ、口縁部が横ナデ、胴部内面がヘラケズリである。56は復元口径19cmを測る。調整は胴部外面が斜めのハケ、口縁部横ナデ、胴部内面がヘラケズリである。57は3分の1を欠くが、底部は残っている。復元口径15.8cm、器高28.1cm、底径10.6cmを測る。調整は外面が底部から胴部上位にかけて縦または斜めのハケ、内面が底部から胴部上位にかけてヘラケズリ、口縁部付近は横ナデである。

須恵器

杯蓋 (58・59)

ともに口縁部を欠くが天井部は残る。58は復元口径11cm、器高5cmを測る。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデである。59は復元口径14.4cm、器高3.5cmを測る。調



第14図 ⑤2区 SDO4出土遺物実測図① (1/3)

整は天井部外面が回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ。

杯身 (60)

全体の約3分の2を欠く。復元口径14cm、器高4.9cm、高台径9.7cmを測る。調整は体部内外面が回転ナデ、底部内面が不定方向のナデ、高台付近はヘラケズリの後回転ナデである。

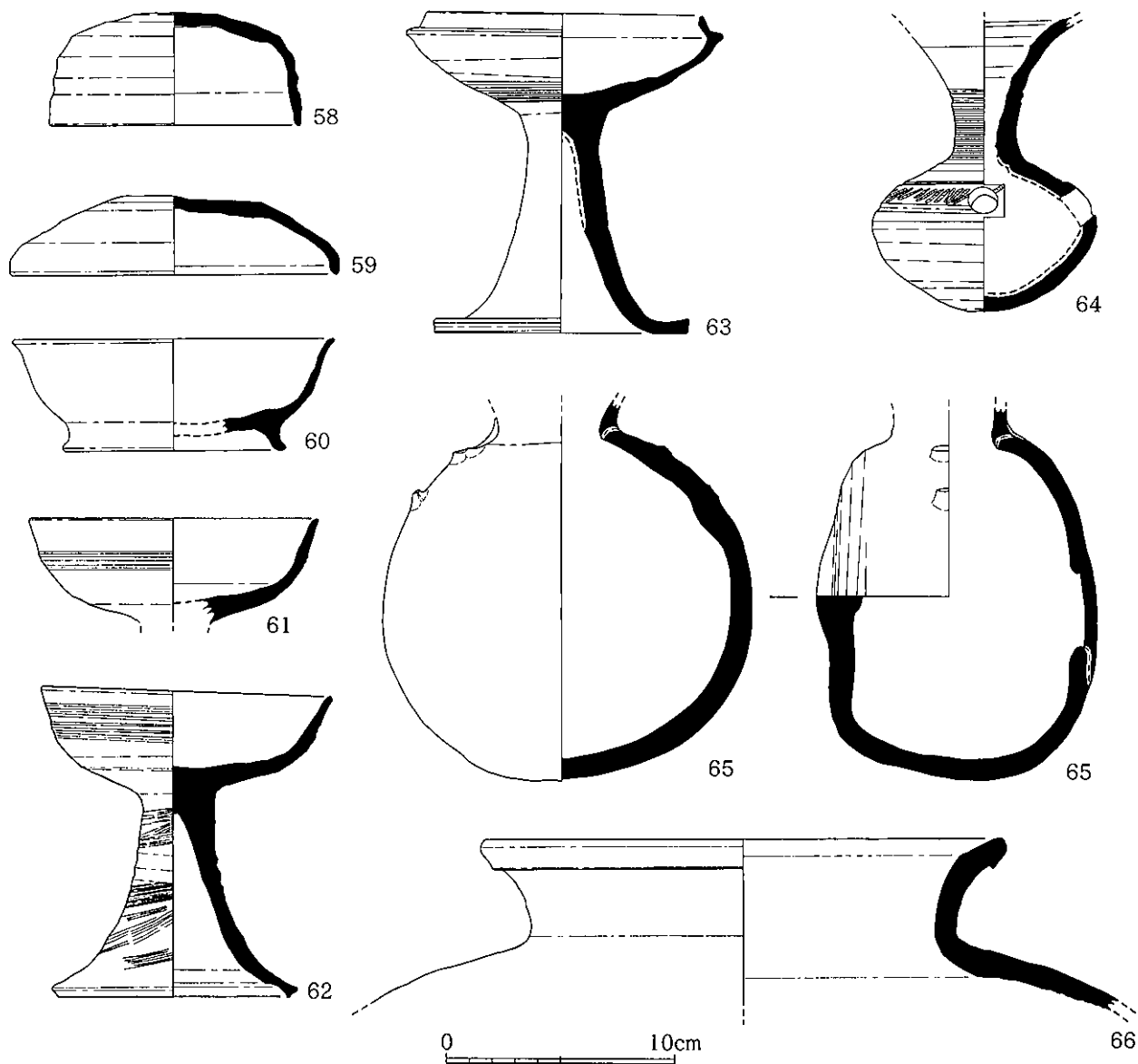
高杯 (61~63)

61は脚部を完全に欠く。復元口径12.6cm。杯部下位は回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデと不定方向のナデ。杯部中位にカキ目を施す。62は口径12.6cm、器高13.4cm、脚端径10.2cm。杯部下位は回転ヘラケズリ、その他の部分は回転ナデと不定方向のナデ。杯部中位にカキ目を施す。脚部外面はカキ目を施し、端部から内面は回転ナデと不定方向のナデで、内面にヘラ記号がある。63は全体の約5分の1を欠く。受部径12.1cm、器高14cm、脚端径11cm。調整は、杯部下位はヘラ切り後カキ目、その他は回転ナデと不定方向のナデ。脚部は内外面とも回転ナデ。脚部内面上位ではシボリ痕をナデ消す。

甕 (64)

口縁部を欠く。胴部最大径9.8cm。調整は体部外面下位が回転ヘラケズリ、体部上位から頸部外面がカキ目調整、頸部内面は回転ナデである。肩部には2条の沈線の間に刺突文を施す。

提瓶 (65)

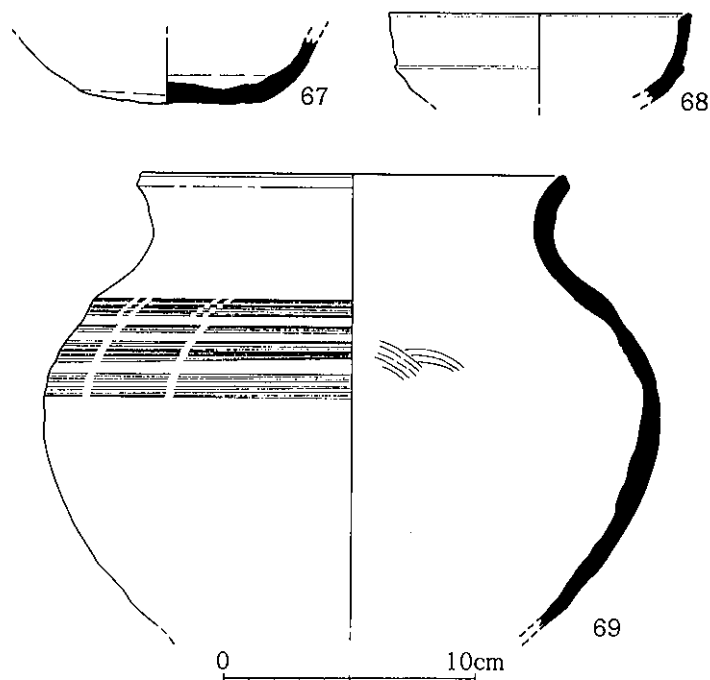


第15図 ㊦2区 SDO4出土遺物実測図② (1/3)

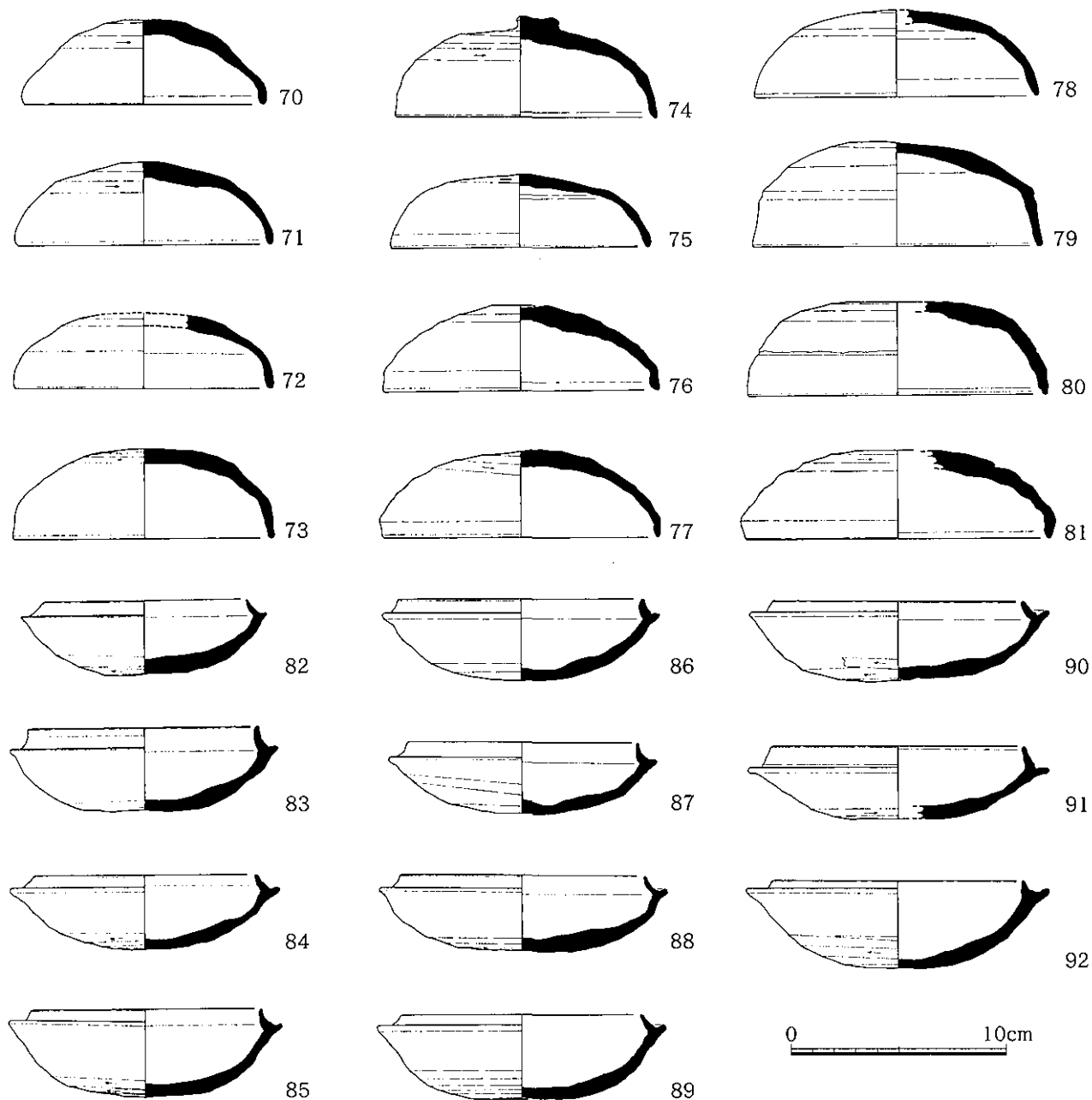
口頸部と把手を欠く。正面観はほぼ正円、側面観はやや丸みを帯びる。胴部最大径16.1cmを測る。底部から片方の面の前面にカキ目を施し、もう片方の面は回転ナデ、回転ヘラケズリ、不定方向のナデで調整する。内面は回転ナデ。全体に自然釉をかぶっている。

甕 (66)

口縁部付近のみ残る。復元口径23cm。調整は、口頸部内外面とも回転ナデ、胴部上位には外面に叩き、内面に当て具の痕跡があるが判然としない。一部に自然釉がかかる。



第16図 ㊦2区 SDO5出土遺物実測図(1/3)



第17図 ㊦2区 SD13出土遺物実測図① (1/3)

SD05

溝SD05は、御笠川の氾濫原の砂層を厚さ約40cm取り除くと現れた。東側の壁は確認できたが、西側の壁はSD04と錯綜しており確認することができなかった。そのため幅はわからない。深さは約60cm～1mである。SD04との新旧関係は明らかでない。

出土遺物 (第16図)

須恵器

杯身 (67・68)

67は復元底径7.2cm。底部外面はヘラ切り未調整、その他は回転ナデ。68は復元口径12cm。体部外面下位と内面は回転ナデ、その他の部分には自然釉が厚くかかり調整不明。

壺 (69)

頸部が短く外反し、復元口径16.7cmを測る。調整は、口頸部が内外面とも回転ナデ。外面の肩部から中位にかけてカキ目、下位は格子状の叩き。内面中位から下位にかけて同心円状の当て具痕が見られる。

SD13

溝SD13は、これまで数次にわたって確認してきたSD13あるいは大溝と同じ溝である。調査区のほぼ中央を南から北へ流れる形で検出された。SDO4、不整形土坑SXO1、SXO2、SXO3と切り合い関係にある。新旧関係は、SDO4より古く、SXO1、SXO2、SXO3より新しい。すなわち、北側をSDO4に切られており、また、掘り下げを進めていく段階でSXO1、SXO2、SXO3を切っていることがわかった。東側の壁は3段掘りになっている。幅は約2.5m～3.5m、深さは約1.1m～1.7mを測った。埋土は黒色の粘質土で、馬の歯や、下顎の部分的な骨が数点出土している。これはこれまでのSD13の所見と同様である。激しい湧水があった。

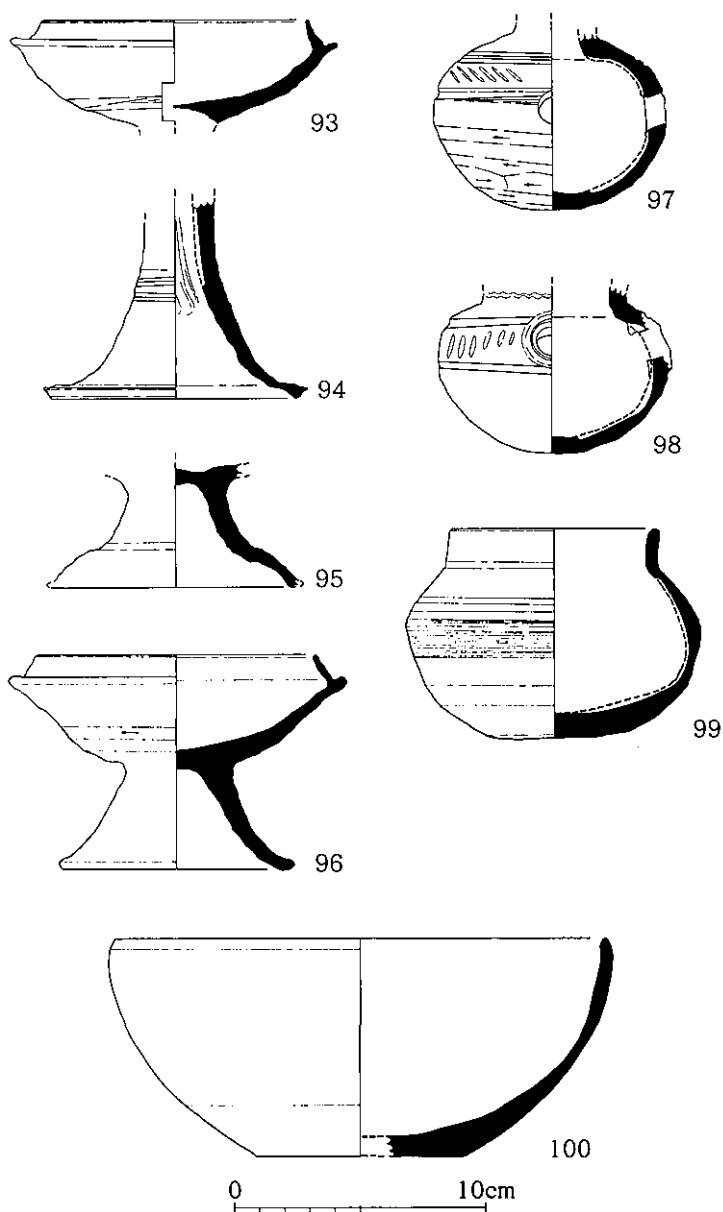
出土遺物 (第17図～第21図)

須恵器

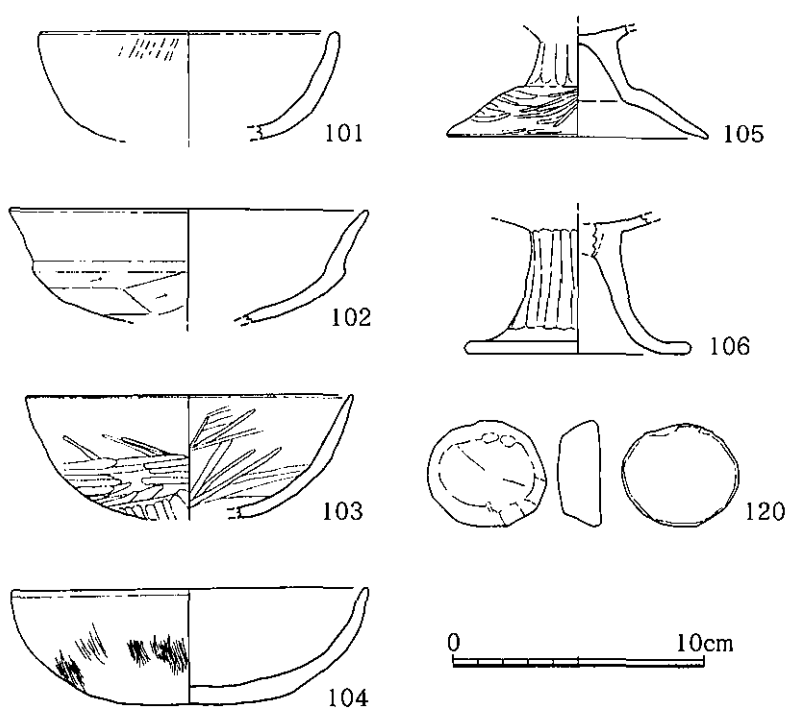
杯蓋 (70～81)

復元口径が11.1cm～14cm、器高3.9cm～4.3cmを測る。調整は、74と77以外は天井部外面を回転ヘラケズリし、体部内外面を回転ナデ、天井部内面を不定方向のナデで仕上げる。74は直径2cmのつまみを貼りつけるために、天井部外面を回転ヘラケズリした後に回転ナデを加えている。また、他の部分を回転ナデのみで仕上げる。77は天井部外面回転ヘラケズリ、その他は回転ナデのみ。

杯身 (82～92)



第18図 ⑤2区 SD13出土遺物実測図② (1/3)



第19図 ⑤2区 SD13出土遺物実測図③ (1/3)

90のみ完形、その他は図上復元した。復元口径9.3cm～11.8cm、受部径11.4cm～14cm、器高3.5cm～4.1cmを測る。調整はいずれも底部外面を回転ヘラケズリし、体部内外面を回転ナデ、底部内面を不定方向のナデで仕上げる。

高杯 (93～96)

93・94は長脚、95・96は短脚のものである。93は杯部のみで、口径10.7cm、受部径13cmを測る。底部外面を回転ヘラケズリし、脚部接合のためナデる。体部内外面は回転ナデ、底部内面を不定方向のナデで仕

上げる。94は脚部のみで、裾部径10.5cm。内外面ともに回転ナデを施し、内面上位にはシボリ痕が見られる。95は端部を欠くので裾部径が不明。全体に回転ナデを施し、杯部の底部内面は不定方向のナデ。96はほぼ完形で、口径11.1cm、受部径13.4cm、裾部径9.3cm、器高8.5cmを測る。杯部の底部外面を回転ヘラケズリ後回転ナデ、その他の部分を回転ナデ、杯部の底部内面のみ不定方向のナデを施す。

甕 (97・98)

いずれも口縁部を欠く。97は胴部最大径9.2cm。肩部に2条、穿孔部に1条の沈線、その間に刺突文を施す。下位の調整は回転ヘラケズリだが、一部手持ちヘラケズリのようにも思われる。98は胴部最大径9.2cm。穿孔部を挟むように沈線が施され、その間に刺突文を施す。頸部の最下位には2条の波状文を施す。調整は上位は回転ナデだが、下位は内外ともに風化のため判然としない。

短頸壺 (99)

口径8.3cm、胴部最大径11.7cm、器高13.4cmを測る。調整は、底部外面を回転ヘラケズリ後ナデ、その他は回転ナデである。胴部中位にカキ目を施す。

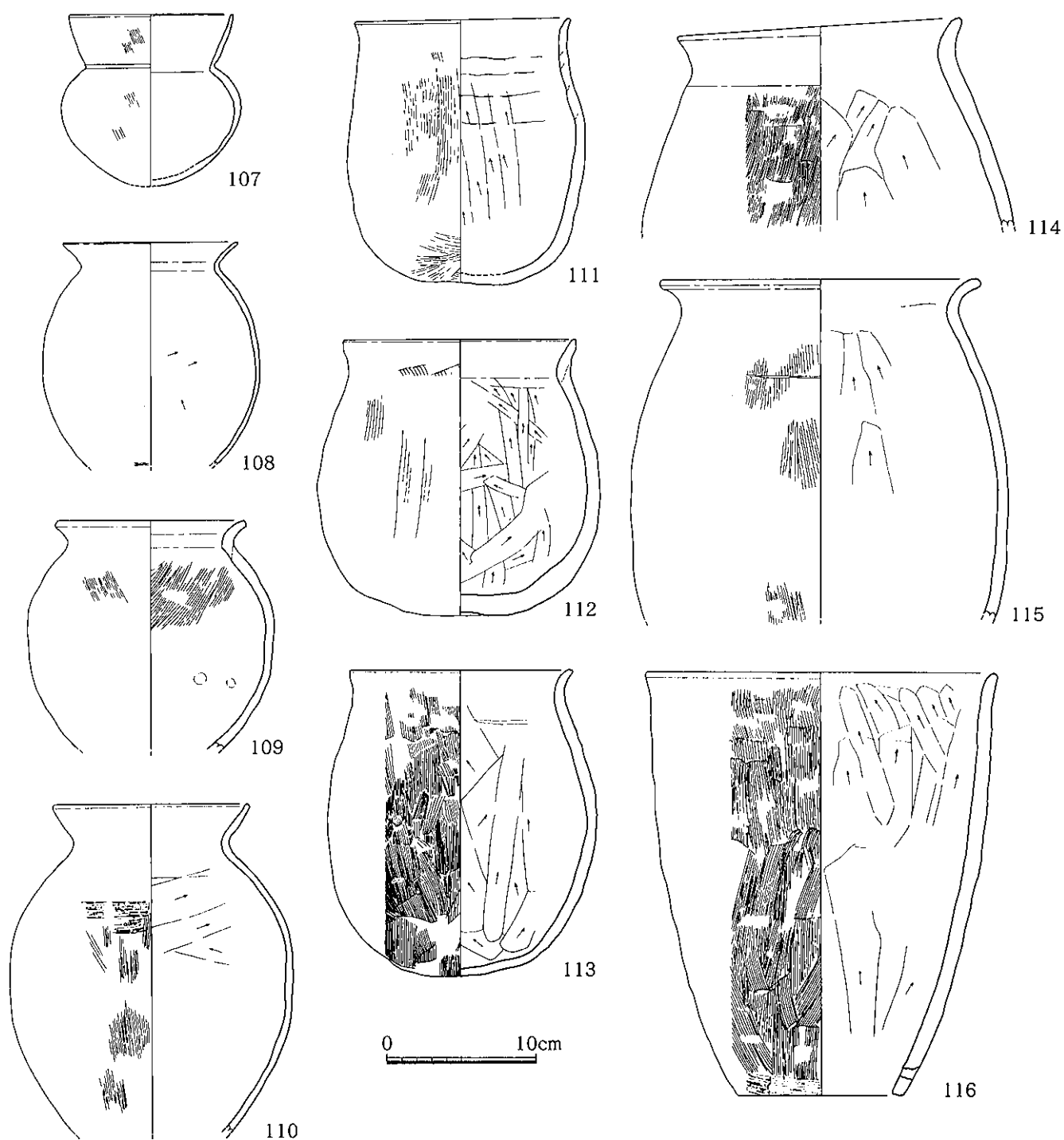
鉢 (100)

図上復元で口径19.8cm、底径7.4cm、器高8.2cmを測る。調整は、底部外面が回転ヘラケズリ後ナデ、体部下位は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデであるが、内面は自然釉が厚くかかり不明。

土師器

杯 (101～104)

いずれも図上復元したものである。101は口径12cm。調整は内面がナデ、外面の口縁部付近はハケ目、その他は風化のため不明。102は高杯の杯部の可能性がある。口径14.2cm。底部外面に

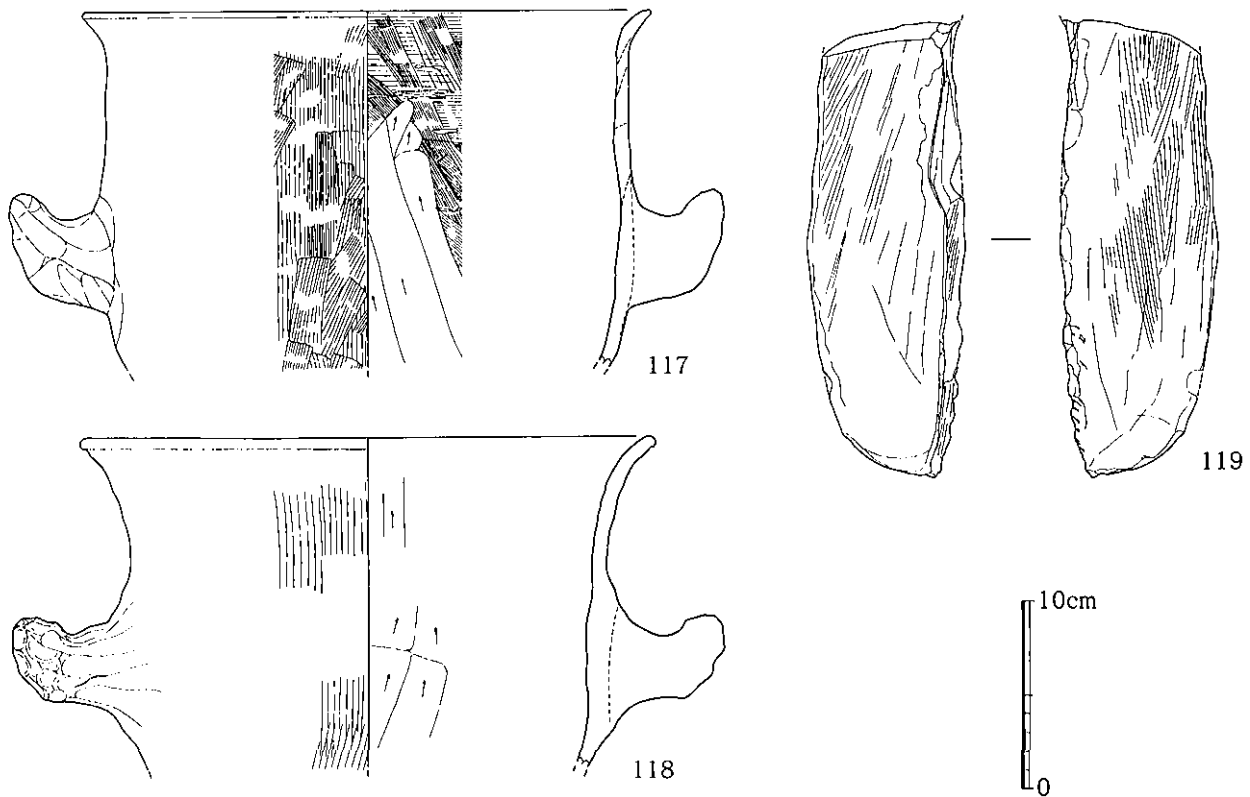


第20図 ㉟2区 SD13出土遺物実測図④ (1/4)

手持ちヘラケズリを施す。その他は回転ナデと不定方向のナデ。103は口径13cm。内外面ともにヘラミガキを施し、器壁は薄く均一である。104は口径14.2cm。体部外面中位以下にハケ目を施す。

高杯 (105・106)

いずれも脚部のみ残る。105は裾部径10.4cm。外面の端部から中位にかけてヘラミガキ、上位には面取りふうの手持ちヘラケズリを施す。106は図上復元で裾部径9cm。裾端部付近は回転ナ



第21図 ㉟2区 SD13出土遺物実測図㉟ (1/4)

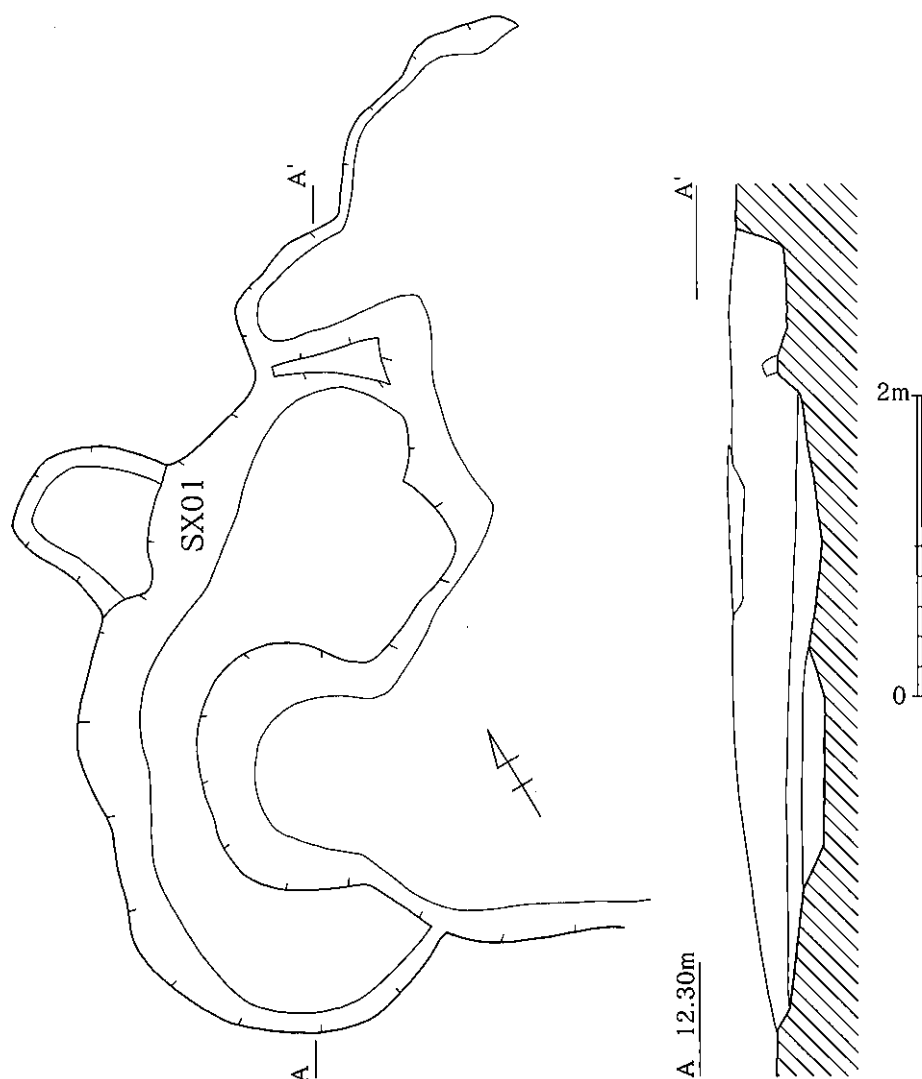
デ、外面上位は面取りふうの手持ちヘラケズリ、その他は風化のため不明である。

壺 (107～110)

107はほぼ完形、他は図上復元した。107は口径11.1cm、胴部最大径12cm、器高11.5cmを測る。調整は、外面の一部に斜め方向のハケ目が残る以外は風化のため不明。108は口径11.6cm、胴部最大径14.9cm。風化がはげしく調整は不明。109は口径12.4cm、胴部最大径16.4cm。胴部内外面上位に斜め方向のハケ目、内面下位に指オサエの痕跡が残る。110は口径13.1cm、胴部最大径18.8cm。胴部外面に縦・横方向のハケ目、内面上位に斜め方向のヘラケズリ、口縁部には回転ナデを施す。

甕 (111～115)

いずれも図上復元した。111は口径11.1cm、胴部最大径12cm、器高11.5cm。調整は外面が底部から胴部下位にかけて斜め方向のハケ目、胴部中位から上位が縦方向のハケ目、口縁部が回転ナデ、内面は縦方向のヘラケズリである。内面上位に粘土を積み上げた痕跡が見られる。112は口径15.3cm、胴部最大径18.7cm、器高18.4cm。底部外面の調整は不明、胴部外面に縦方向のハケ目、内面は胴部上位から底部にかけて不定方向のヘラケズリ、口縁部に回転ナデを施す。113は口径14.7cm、胴部最大径17.9cm、器高20.4cm。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリであるが、底部外面はハケ調整の後ナデる。また、口縁部には回転ナデを施す。114は口径19cm、115は口径21.4cm。調整はいずれも外面がハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部を回転ナデで仕上げる。



第22図 ⑤2区 SX01実測図 (1/50)

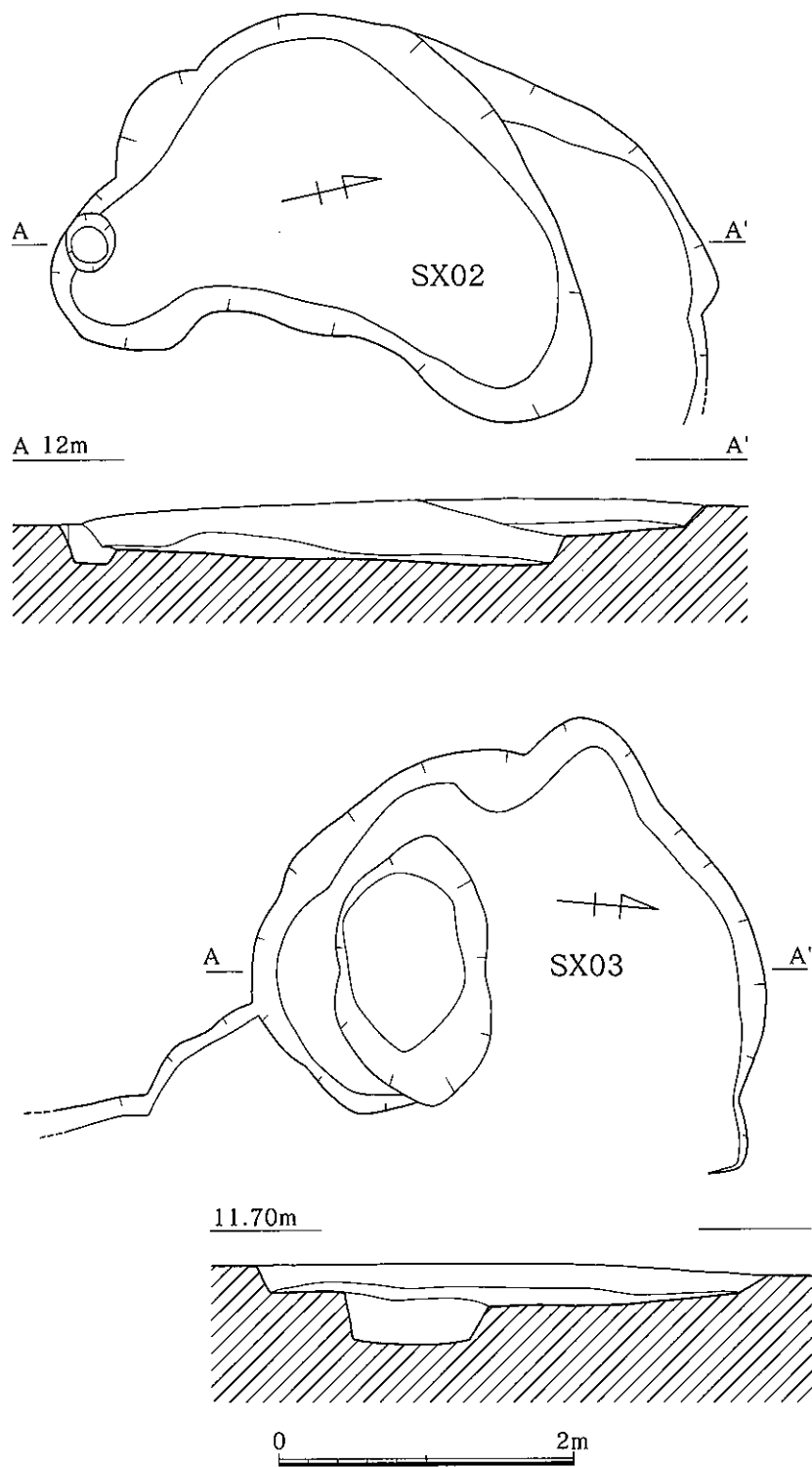
甕 (116~118)

いずれも図上復元した。116は口径23.3cm、底径11cm、器高28.4cm。残存部位からは、もともと把手が付いたかはわからない。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部を回転ナデで仕上げる。底部付近の穿孔は外側から内側になされる。117、118は把手付甕の可能性はある。117は口径30cmを測る。外面の調整はハケ目、内面はハケ目の後ヘラケズリし、口縁部を回転ナデで仕上げる。把手を貼りつけた後、手指によるナデ、オサエ調整を施す。118は口径30cm。外面の調整はハケ目、内面はヘラケズリであるが、117に比べると粗雑である。把手は、貼りつけた後で手指によるナデ、オサエ調整を施す。

移動式竈 (119)

移動式竈の右側の脇庇と思われる。残存長24.2cm、幅8.4cmを測る。土師質で、焼成は良好である。全体に粗いハケ目とナデを施す。本体に貼りつけた後、接合部をハケ目調整した痕跡が見られる。

石製品



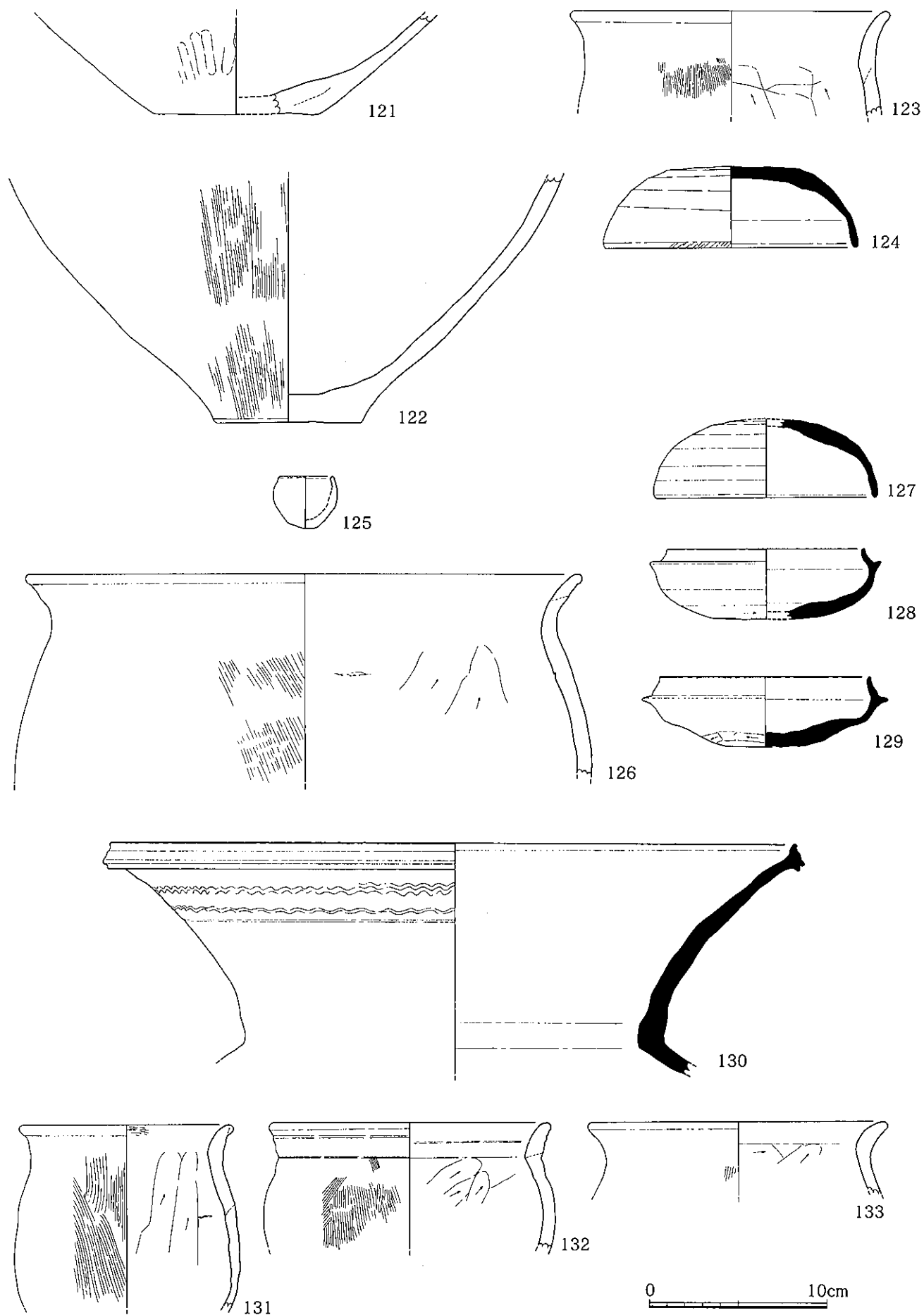
第23図 ㊦2区 SX02、SX03実測図 (1/50)

円盤状遺物 (120)

穿孔していない紡錘車のような滑石製の製品である。ほぼ正円に近いが、長軸4.7cm、短軸4.3cm、厚さ1.7cmを測る。断面が台形になるように端部を面取りしている。

㊦不整形土坑

3基の不整形土坑は、調査区南端部付近で、SD13に切られる形で検出された。



第24図 ㉟2区 SX01、SX02、SX03出土遺物実測図 (1/3)

SXO1 (第22図)

不整形土坑SXO1は、大型土坑の南西隅にテラスがつくような形で検出された。SD13と切り合い関係にあり、新旧関係はSXO1の方が古い。SXO2とも切りあい関係にあるが、新旧関係は不明である。規模は、南北方向の最大長が約7m、東西方向が5m。最も深い部分は約65cmであった。

出土遺物 (第24図)

弥生土器

底部 (121・122)

壺あるいは甕の底部である。121は復元底径9.5cmを測る。全体に風化が激しいが、外面にミガキの痕跡が残る。122は底径8.2cm。外面に縦方向のハケ目を施す。

土師器

甕 (123)

口縁部のみの小片で、復元口径18.1cmを測る。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部を回転ナデで仕上げる。

須恵器

杯蓋 (124)

口径14.4cm、器高4.6cmを測る。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、体部内外面が回転ナデ、天井部内面が不定方向のナデ。口唇部に斜め方向の刻みを施す。

SXO2 (第23図)

不整形土坑SXO2は、北側が2段掘りとなっている。SD13と切り合い関係にあり、新旧関係はSXO2の方が古い。SXO1とも切りあい関係にあるが、新旧関係は不明である。規模は、南北方向の最大長が約4.5m、東西方向は明らかにできなかったが、2m以上である。最も深い部分は約47cmであった。

出土遺物 (第24図)

土師器

手づくね土器 (125)

ほぼ完形で、口径3.2cm、器高3cmを測る。全体を指オサエで調整する。胎土には極めて微細な金雲母が若干含まれる。

甕 (126)

復元口径31.5cmを測る。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部を回転ナデで仕上げる。内面上位に粘土の接合痕が見られる。

須恵器

杯蓋 (127)

図上復元で口径12.4cm、器高4.5cmを測る。調整は天井部外面回転ヘラケズリ、体部内外面回転ナデ、天井部内面が不定方向のナデである。

杯身 (128・129)



第25図 ㊦4区 遺構配置図 (1/100)

いずれも図上復元した。128は口径11.2cm、受部径13.1cm、器高4cm。調整は底部外面が回転ヘラケズリ、体部内外面が回転ナデ、底部内面が不定方向のナデである。底部外面に自然釉がかかる。129は口径12cm、受部径14cm、器高4cm。底部外面はヘラ切り未調整であるが、一部手持ちヘラケズリを施す。その他の部分は回転ナデと不定方向のナデ。外面全体に自然釉がかかる。

甕 (130)

口頸部のみの残存で、復元口径38.6cmを測る。頸部は逆八の字を描くように外反し口縁に至り、外側に凹凸のある口縁帯を作る。頸部のやや上位には1条の沈線がめぐり、沈線と口縁部の間には波状文を櫛描きする。内外面とも回転ナデを施すが、胴部との接合部付近は特に強く施している。

SX03 (第23図)

不整形土坑SX03は、大型土坑の中央部をさらに掘り下げるような形で検出された。SD13と切り合い関係にあり、新旧関係はSX03の方が古い。規模は、南北方向の最大長が約5m、東西方向が3m。最も深い部分は約55cmであった。

出土遺物 (第24図)

土師器

甕 (131～133)

いずれも図上復元したものである。131は口径12.1cm、調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部が回転ナデ。口縁部内面には横方向のハケ目を加える。内面に粘土の接合痕が見られる。132は口径16cm、133は口径17cmである。調整はいずれも外面がハケ目、内面がヘラケズリ、口縁部を回転ナデで仕上げる。

2 ㊦ 4区

(1) 調査の概要

㊦ 4区は仲畑二丁目194-1、194-2にあたる。㊦ 2区の西隣であり、実際の調査面積は約1000m²であった。

本調査区の遺構面は、地表（旧耕作土）から約1.2m掘り下げたところであられる黒色土である。すでに削平を受けていたと思われるが、ほぼ平坦であり、著しい凸凹は見られなかった。立地としては御笠川西部の沖積地であり、標高は約12mであった。

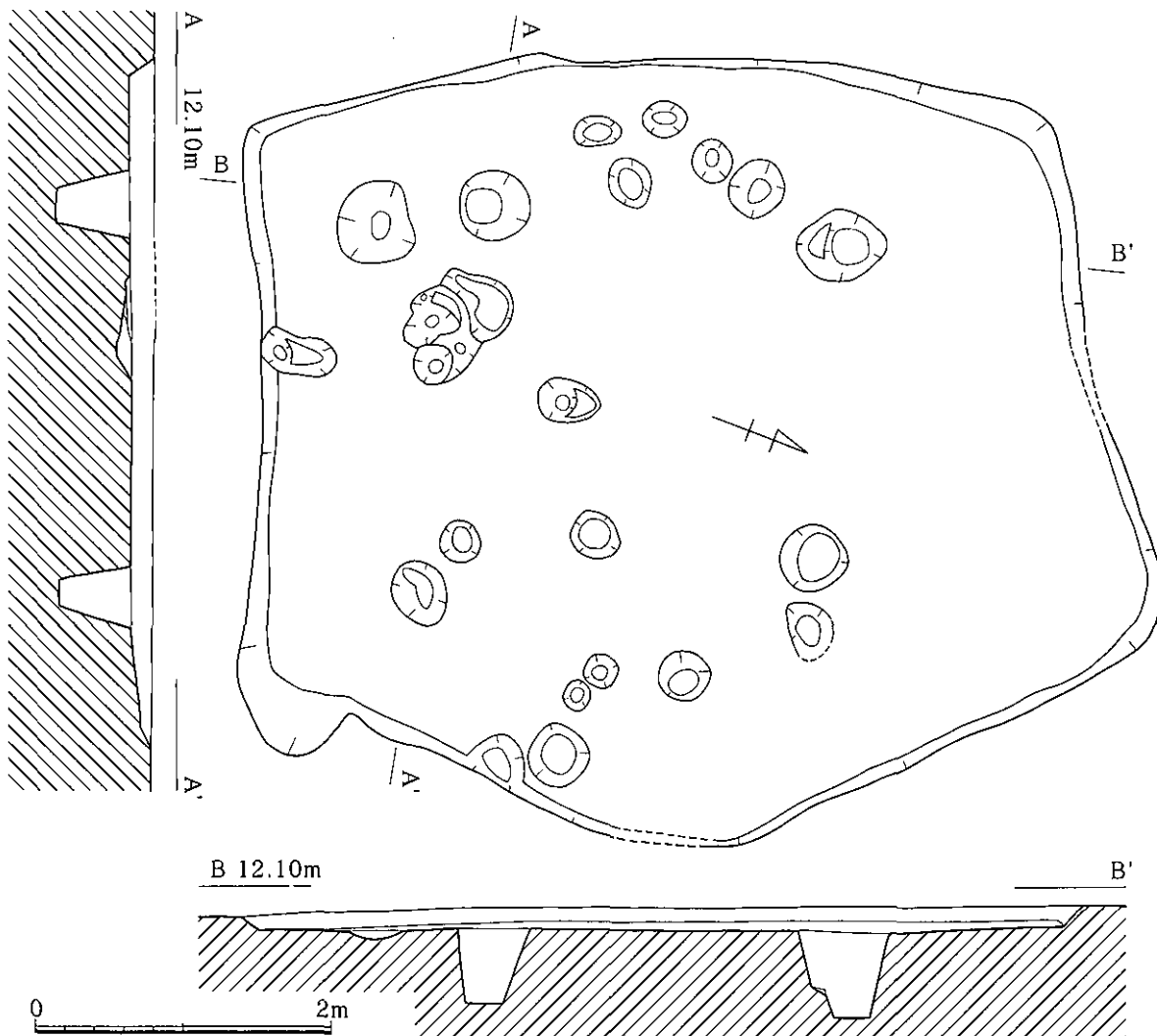
検出した主な遺構は、竪穴住居（SB）4、掘立柱建物（SB）1、井戸（SE）3、溝（SD）3、性格不明な不整形の落ち込み（SX）2である。

(2) 検出遺構と遺物

①竪穴住居

SBO1 (図版5、第26図)

調査区の北東隅近くで検出された。SBO2、SBO5、SDO1と切り合い関係にあり、新旧関係は、SBO2より新しく、SBO5、SDO1より古い。各壁長は、北側で約3.5m、東側約6m、南側約3.5m、西側で約5.5mを測った。壁高は、最も残りの良い部分で約17cmであった。



第26図 ⑤4区 S B O 1実測図 (1/50)

東側壁の中心部が外に突出しているため、五角形に近い平面プランを呈する。床面には直径約45cm～60cm、深さ約20cm～40cmの柱穴が4つ見られた。西側壁のほぼ中央部に、焼土と粘土の堆積が見られたため、カマド痕と考え精査したが、破損が著しくその構造を明らかに出来なかった。

出土遺物 (図版10、第31図)

土師器

高杯 (134)

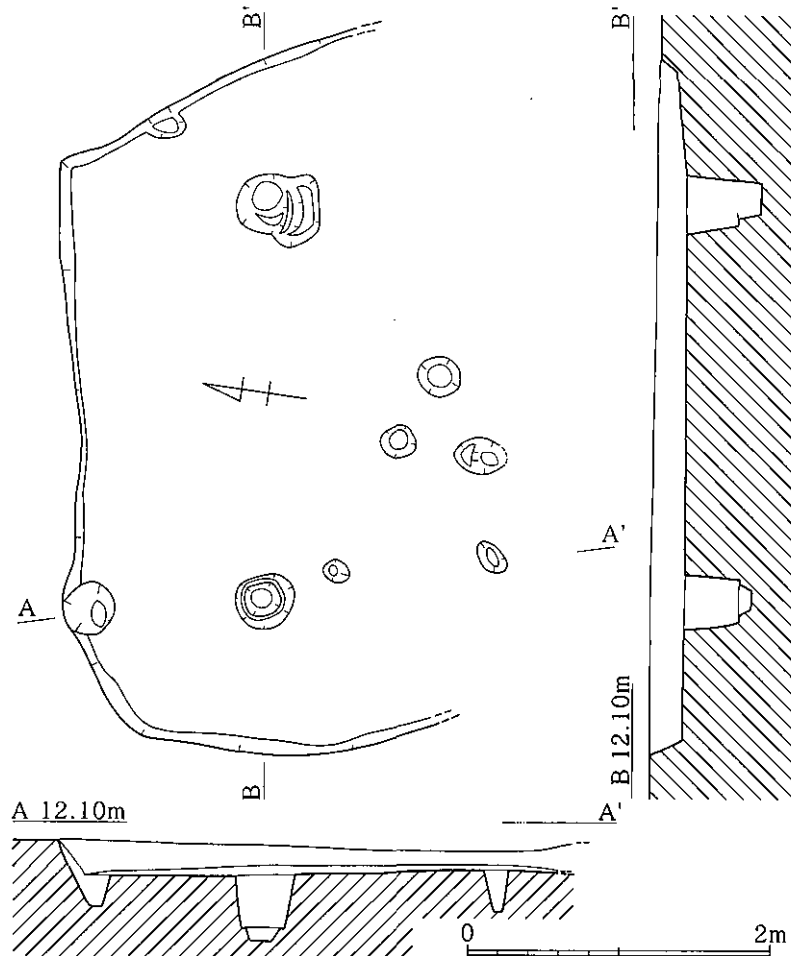
脚部は接合部の痕跡のみ残る。杯部は復元口径13cmを測る。風化がひどく調整は不明だが、外面に丹塗りの痕跡が見られる。

甕 (135)

復元口径15cmを測る。外面をハケ目調整し、口頸部は回転ナデで仕上げる。内面は風化のため調整不明である。

須恵器

杯蓋 (136)



第27図 ⑤4区 SBO2実測図 (1/50)

天井部のほとんどを欠き、復元口径13.3cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデである。

杯身 (137)

底部のほとんどを欠き、復元口径14.1cm、受部径15.7cmを測る。調整は底部外面が回転ヘラケズリ、体部内外面が回転ナデ、底部内面が不定方向のナデである。

SBO2 (図版5、第27図)

SBO1の西隣で検出された。SBO1、SXO1と切り合い関係にあり、新旧関係は、いずれよりも古い。すなわち、SXO1によってその南半部を、SBO1によって東半部を切られている。残存壁長は北側で約2.4m、西側で約2mであり、本来はややゆがんだ方形を呈したものと考えられる。壁高は、最も残りの良い部分で約23cmであった。床面に直径約40cm、深さ約50cm～60cmの柱穴が2つ見られた。その他に炉などの施設は検出されなかった。

出土遺物 (図版10・11、第31図)

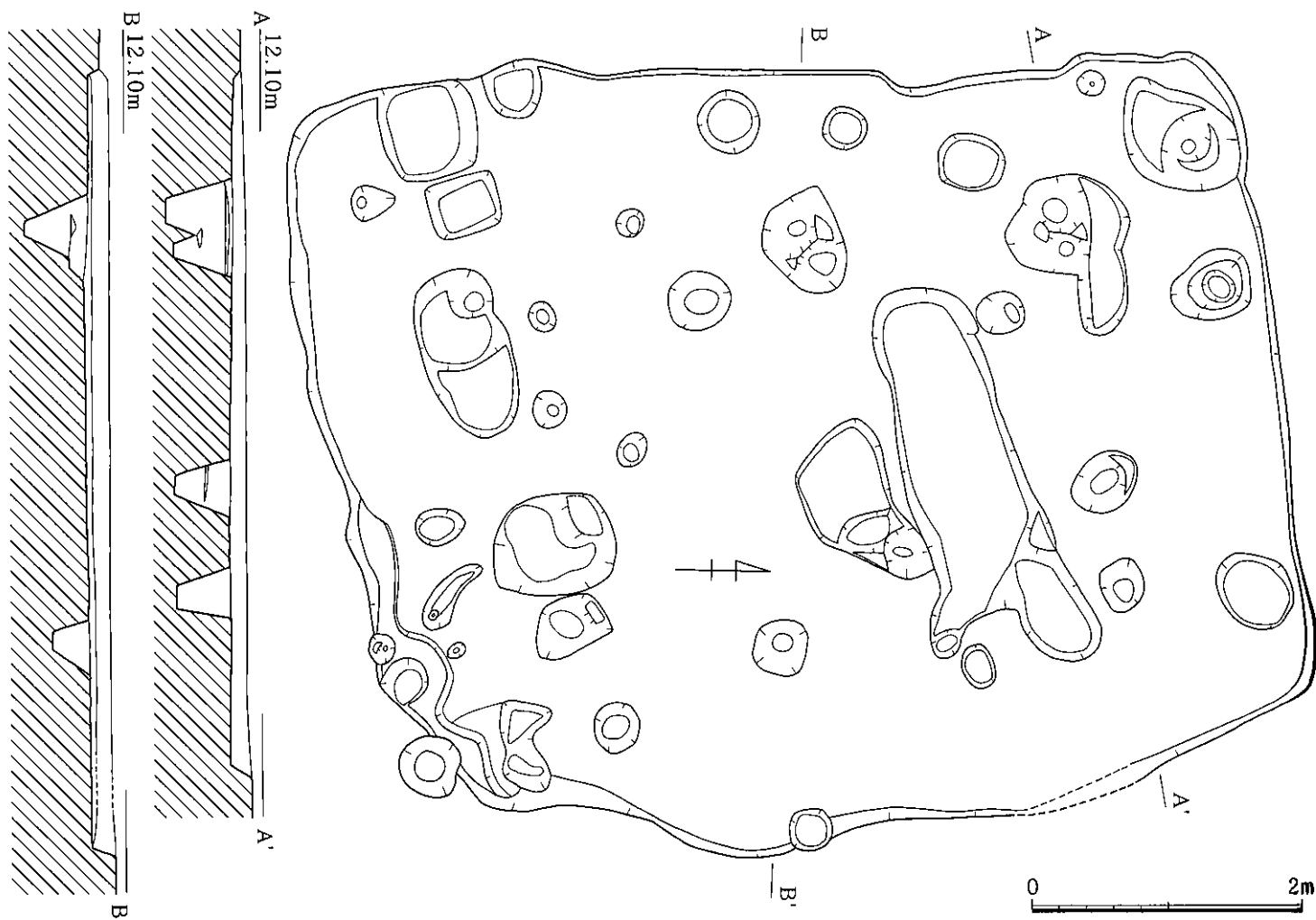
弥生土器

壺 (138)

口縁部の小片。風化がひどく調整等は不明。

土師器

甕 (139)



第28図 ㊦4区 SBO3実測図 (1/50)

復元口径18cmを測る。これも風化がひどいが、外面にわずかに縦方向のハケ目が見られる。

てづくね土器 (140)

ほぼ完形で、口径3.7cm、器高3.4cmを測る。内外面とも手指で押さえて成形・調整している。

石器

不明石器 (141)

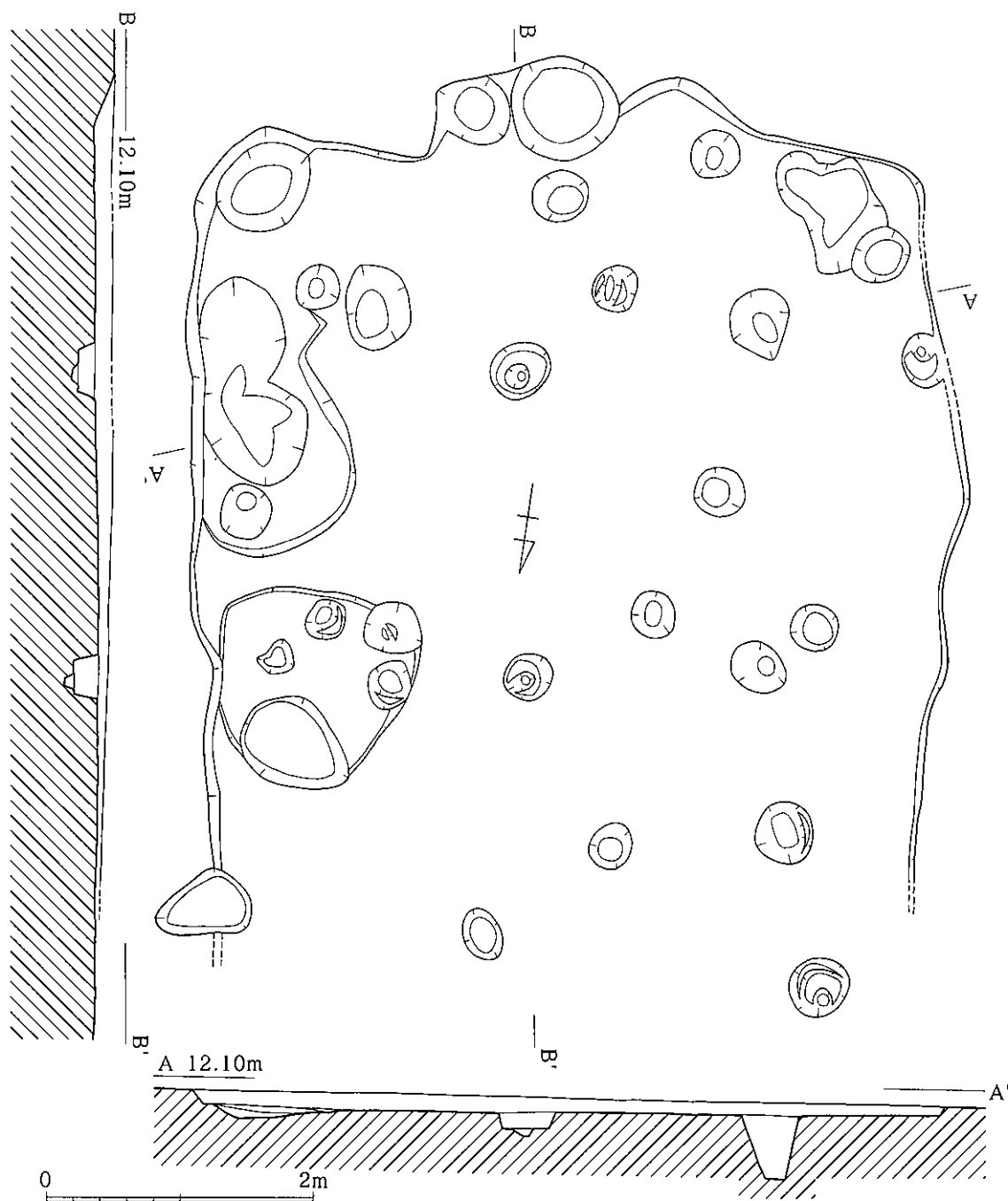
長さ12cm、幅8.5cmを測る。材質は玄武岩か。用途は不明である。

SBO3 (図版6、第28図)

調査区の中央部で検出された。SDO1と切り合い関係にあり、新旧関係は、SBO3の方が新しい。各壁長は、南北側で約4.8m東西側では約6.5mを測り、長方形の平面プランを呈する。壁高は、最も残りの良い部分で約18cmであった。柱穴は4つで、いずれも直径約45cm～50cm、深さ約30cm～40cmを測った。4つの柱穴に囲まれた部分の床面に、長径約2.5m、短径約85cm、深さ約20cmの長円形の掘り込みが見られたが、その性格は不明である。西側壁中央部でカマドの痕が検出されたが、やはり破損が著しく、構造を明らかにすることはできなかった。

出土遺物 (図版11、第31図)

黒色土器・土師器・須恵器・石器が出土した。



第29図 ㊦4区 S B O 4実測図 (1/50)

黒色土器

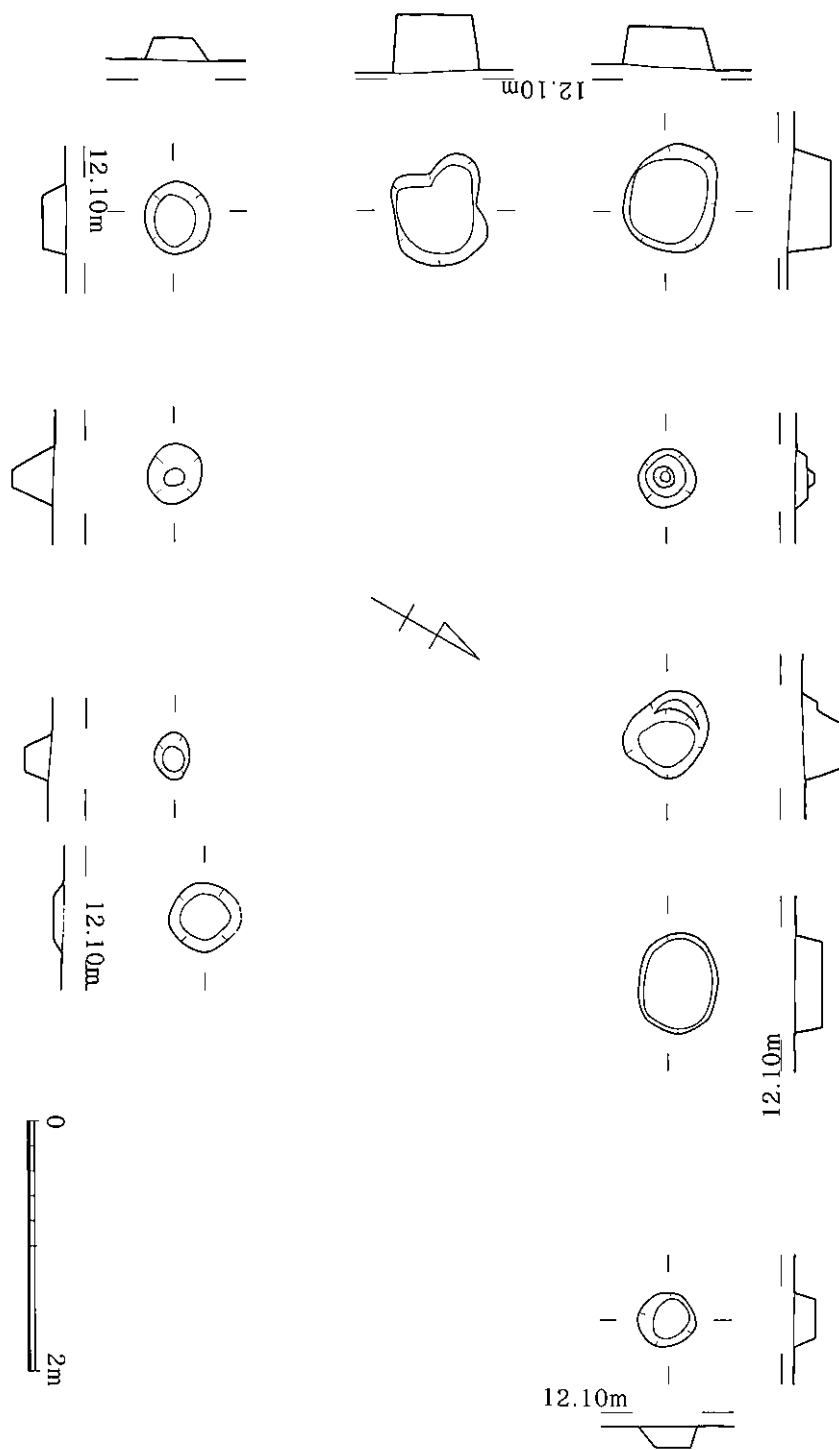
杯 (142)

ほぼ完形で、口径11.4cm、器高5.3cmを測る。胎土はよく精選されており、内外面ともに細かいミガキが施されている。

土師器

甕 (143)

図上復元で口径17.7cm、胴部最大径24.2cm、器高26.7cmを測る。調整は、口頸部が回転ナデ、胴部内面に縦方向のケズリが見られるが、それ以外は風化のため不明である。



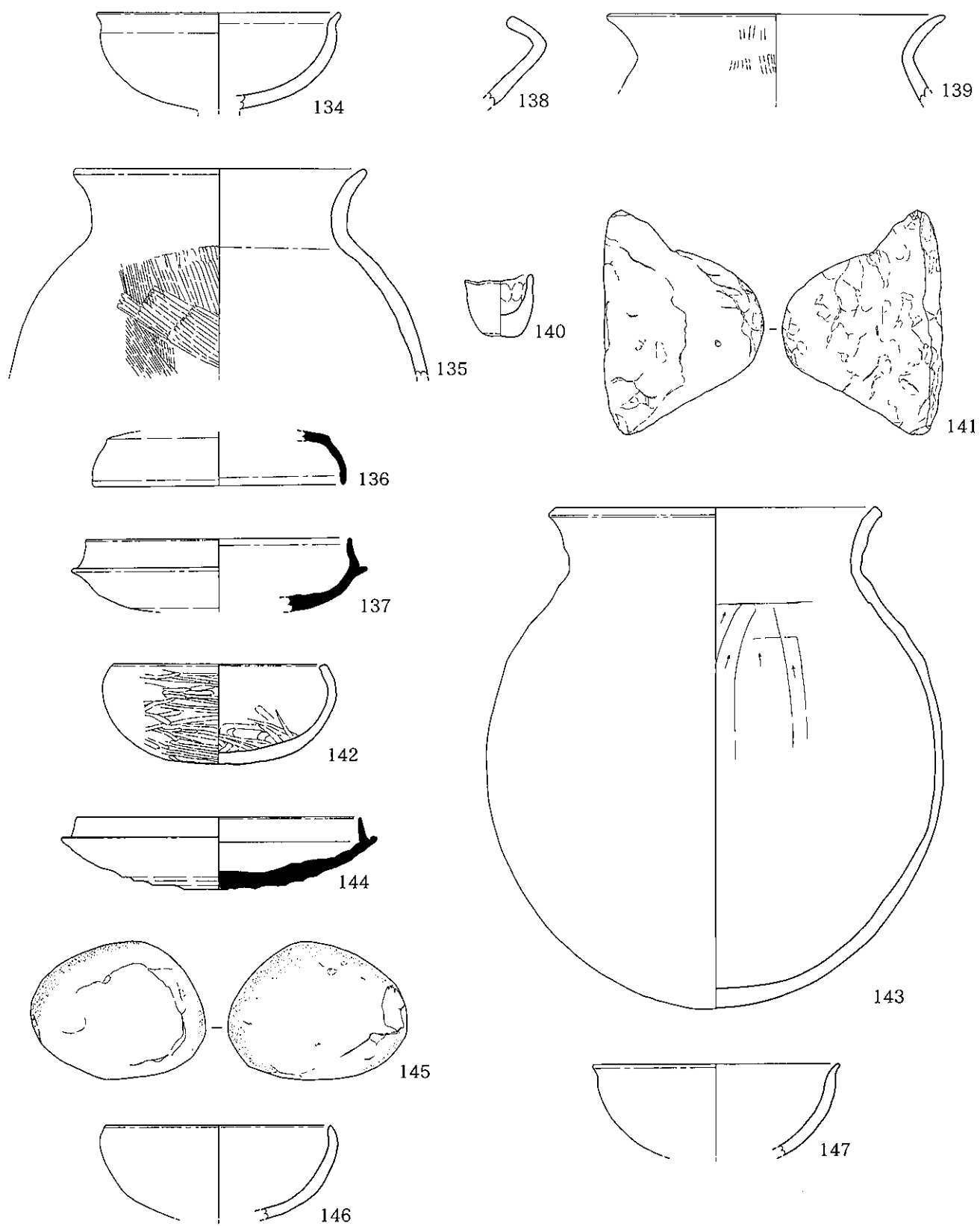
第30図 ㊦4区 S B O 5実測図 (1/60)

須恵器

杯身 (144)

図上復元で口径15.1cm、受部径16.9cm、器高3.8cmを測る。調整は、底部外面回転ヘラケズリ、体部内外面回転ナデ、底部内面不定方向のナデである。

石器



第31図 ㉟4区 SB01、SB02、SB03、SB04出土遺物実測図 (1/3)

磨石 (145)

長軸9.2cm、短軸7.2cmを測る。使用痕は不明瞭。材質は頁岩か。

SBO4 (図版6、第29図)

SBO3の約1.5m北で検出された。残存状態が悪く、北側の壁は検出することができなかった。それ以外の壁長は、東側が約5.5m、西側約5.3m、南側約5.2mを測ったが、東西の壁については本来もう少し長かった可能性がある。壁高は、最も残りの良い部分で約14cmであった。柱穴は4つで、いずれも直径約45cm～50cm、深さ40cm前後を測った。南側壁中央部でカマドの痕が検出されたが、構造などはわからなかった。

出土遺物 (第31図)

土師器

杯 (146・147)

いずれも図上復元した。146は口径12.1cm、147は口径13.1cmを測る。ともに口縁部に回転ナデを施すが、他の部分は風化のため調整不明。

②掘立柱建物

SBO5 (図版5、第30図)

調査区の北西端部近くで検出された。SBO1、SBO2と切り合い関係にあり、新旧関係は、いずれよりもSBO5の方が新しい。一部の柱穴を見つけることができなかったが、2間×4間の掘立柱建物と思われる。柱穴の中心間の距離は、桁方向で約2m～2.5m、梁方向で約1.5m～1.7mを測った。3つの柱穴から、柱にした木材の一部が出土した。

出土遺物

土師器・須恵器が若干出土したが、小片のため図示できない。

③井戸

SEO1 (図版6、第32図)

調査区の中央部、やや西寄りで検出された。直径約1.3mのわずかにゆがんだ円形プランを呈し、深さは約75cmであった。調査中も絶えず水が湧き出していた。

出土遺物 (第33図)

弥生土器

壺 (148・149)

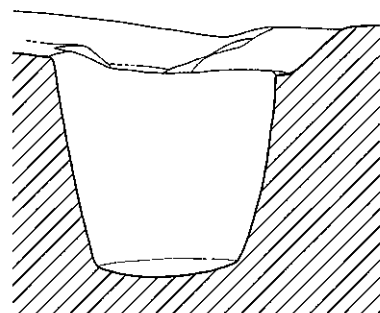
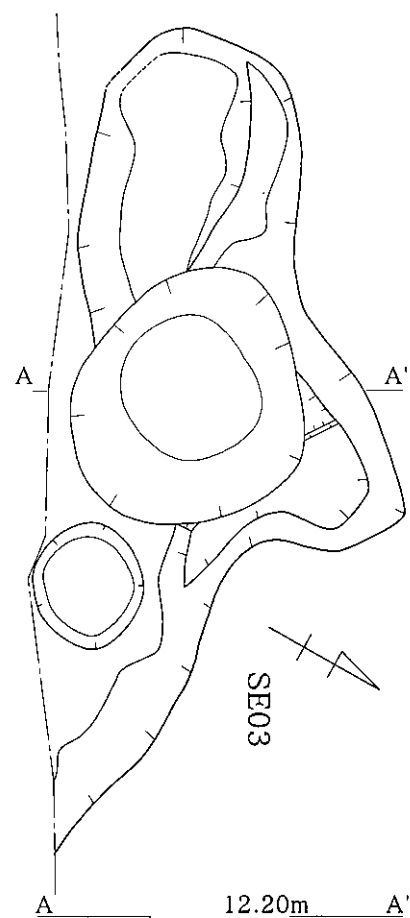
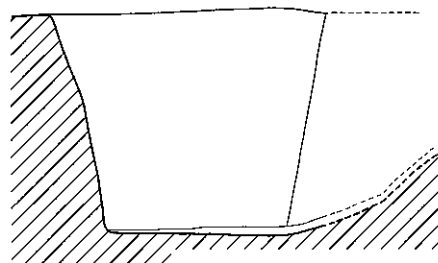
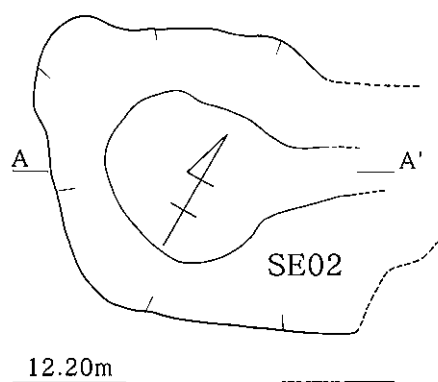
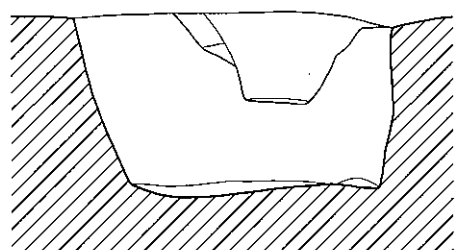
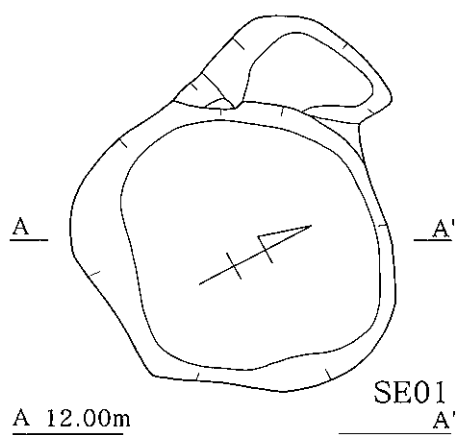
148は口縁部、149は胴部を図上復元したが、同一個体の可能性がある。いずれも胎土が精良で内外面ともに丹塗りの痕跡が見られる。148は復元口径9.5cm、頸部外面に縦方向のミガキ。149は胴部最大径20.3cm。調整は外面が横方向のミガキ、内面が指オサエである。

甕 (150・151)

150は復元口径25cmを測る。調整は外面が縦方向のハケ目、内面は風化のため不明。151は底部のみ残り、調整は外面が縦方向のハケ目、内面は風化のため不明。

SEO2 (図版7、第32図)

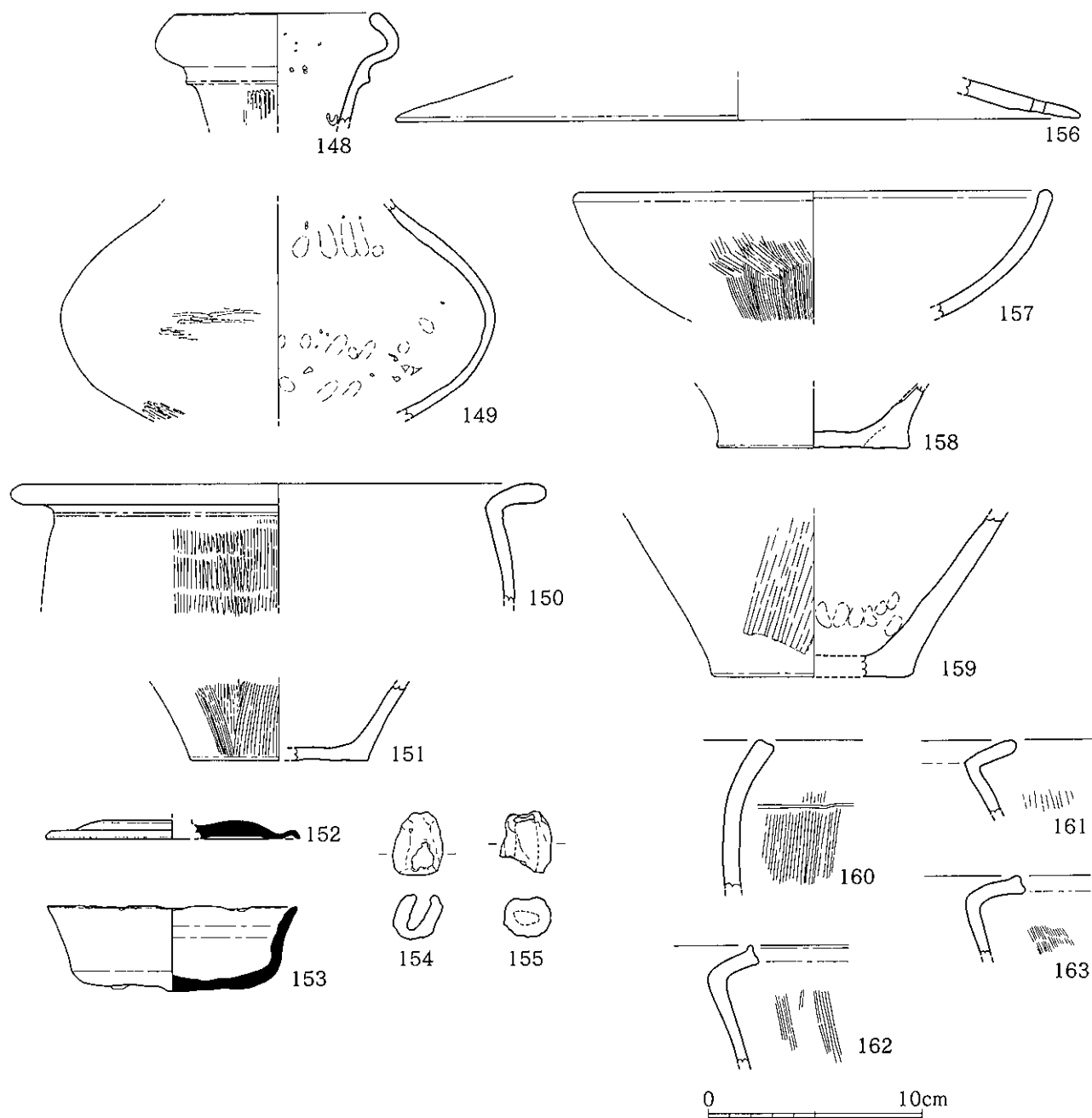
調査区のほぼ中央で検出された。約1.1m×1.1mのややゆがんだ隅丸方形を呈する。東側に溝が



第32図 ㊦4区 SE01、SE02、SE03実測図 (1/30)

つくような形であるが、この部分は他の遺構と一緒に掘り下げた可能性が高い。深さは約85cm。底面は直径約70cmの円形で、木材が若干出土した。SE01同様に、調査中も湧水が絶えなかった。

出土遺物 (図版11、第33図)



第33図 ㊦4区 SEO1、SEO2、SEO3出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

杯蓋 (152)

図上復元で口径11.8cmを測り、つまみを貼りつけた痕跡が見られる。調整は、天井部外面を回転ヘラケズリし、つまみを貼りつけるために回転ナデを加える。口縁部は回転ナデ、天井部内面は不定方向のナデである。

杯身 (153)

図上復元で口径11.7cm、器高4cmを測る。調整は、底部外面が回転ヘラケズリ、体部内外面が回転ナデ、底部内面が不定方向のナデである。口縁の一部を焼成後打ち欠いている。

土製品 (154・155)

154は土師質で長さ3cm、幅2.3cmを測る。粘土を折り曲げたような形を呈する。
155も土師質で長さ2.8cm、幅2.4cmを測る。中空の筒状を呈する。

SE03 (図版7、第32図)

調査区南辺中央部やや東寄りで検出された。直径約1.1mの円形プランを呈し、深さは約98cmを測った。底面は円形で直径約58cmであった。SE01、SE02同様に調査中も湧水が絶えなかった。

出土遺物 (第33図)

弥生土器

蓋 (156)

口縁部だけの小破片である。復元口径32cmを測る。胎土は精良で外面に丹塗りの痕跡が残る。

鉢 (157)

図上復元で口径22.3cmを測る。胎土は精良で、外面を縦方向と斜め方向のハケ目調整している。

甕 (158~163)

158は図上復元で底径9cm。風化のため調整は不明。159は復元底径9.4cm。外面を斜め方向のハケ目、内面を指オサエで調整している。160~163は口縁部の小破片で、いずれも外面をハケ目調整している。

④溝

SD01 (第25図)

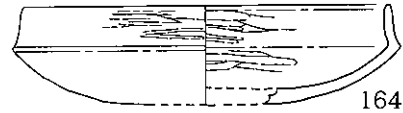
調査区の中央からやや東寄りを、北西から南東へ流れる形で検出された。SBO1、SBO3、SDO2、SDO3と切り合い関係にある。新旧関係は、SBO1、SDO2、SDO3より新しく、SBO3より古い。幅は約45cmで一定しているが、深さは南東へ行くほど深くなり、最も浅い部分(SBO1と切り合う付近)で約25cm、最も深い部分(SDO2、SDO3と切り合う付近)では約52cmを測った。

出土遺物 (図版11、第34図)

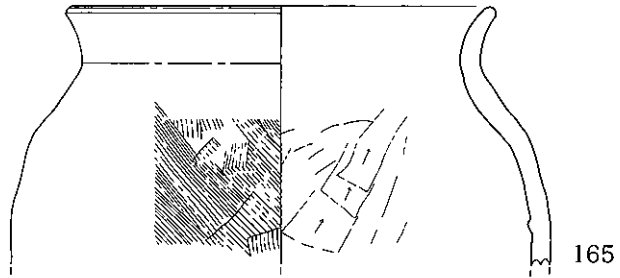
土師器

杯 (164)

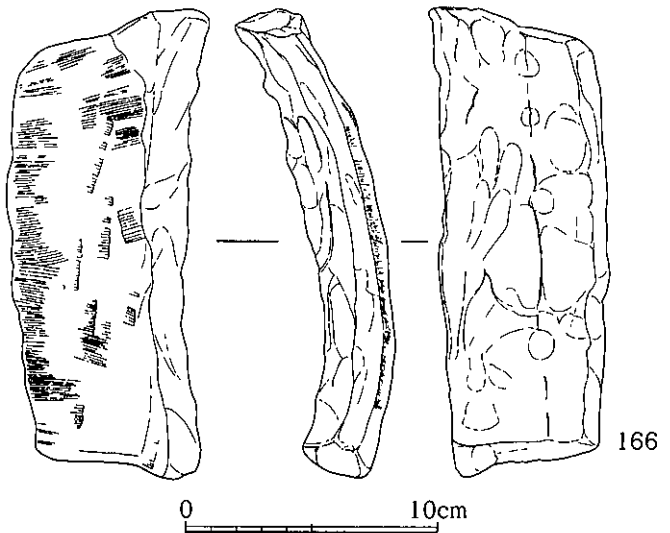
図上復元で口径14.5cm、器高4cmを測る。内外面とも部分的にミガキの痕跡が残る。須恵器の器形を意識して作られたものと思われる。



164

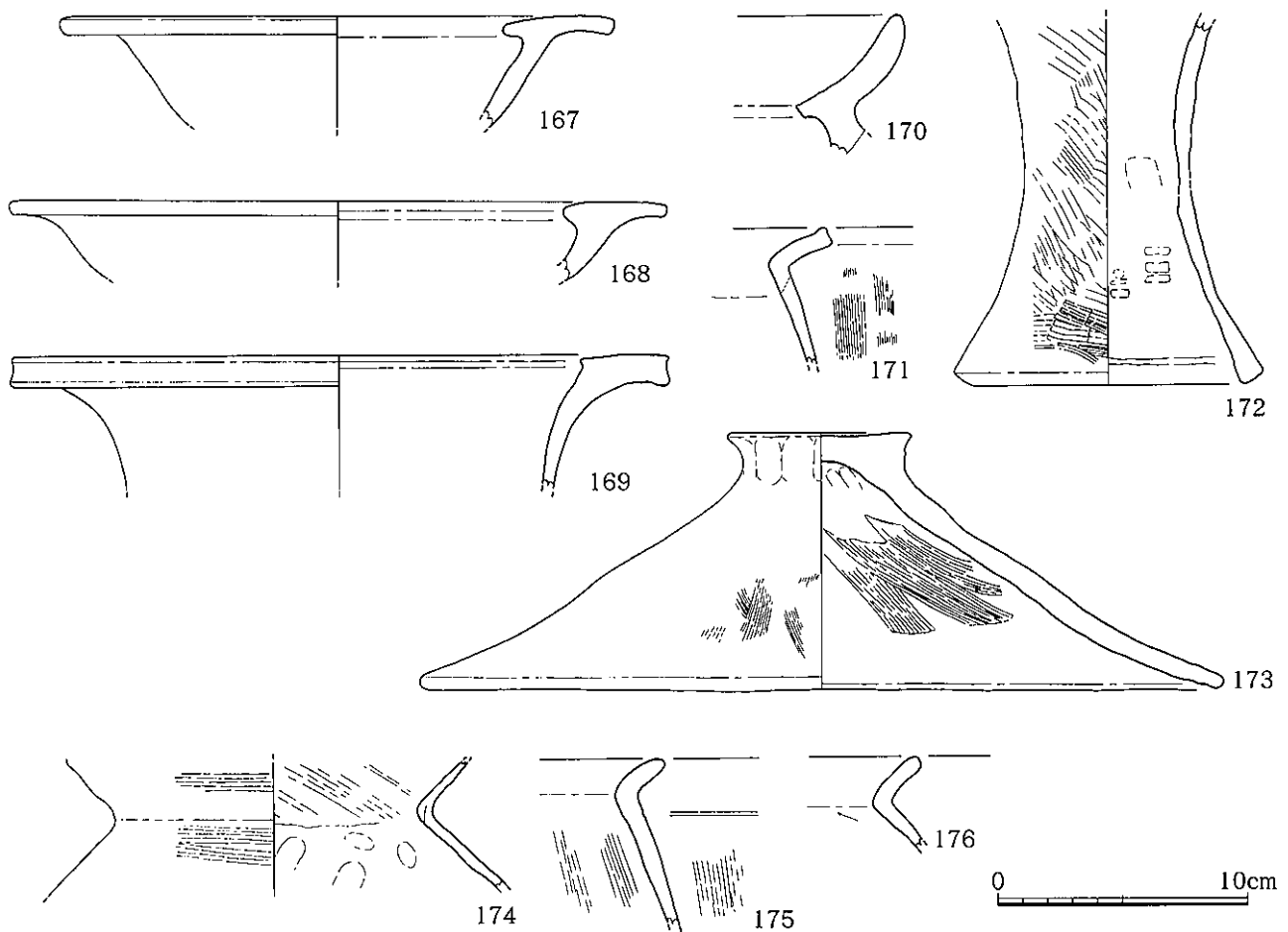


165



166

第34図 ⑤4区 SDO1出土遺物実測図 (1/3)



第35図 ⑤4区 SDO2出土遺物実測図 (1/3)

甕 (165)

胴部中位以下を欠き、復元口径17cmを測る。外面を斜め方向のハケ目、内面を斜め方向のケズリで調整し、口縁部は回転ナデで仕上げる。

移動式竈 (166)

移動式竈の左側の脇底と思われる。残存長18.7cm、幅6.5cmを測る。土師質で、焼成は良好である。調整は外側がハケ目、内側がナデと指オサエで、内外面ともに粘土を継ぎ足したような痕跡が認められる。

SDO2 (第25図)

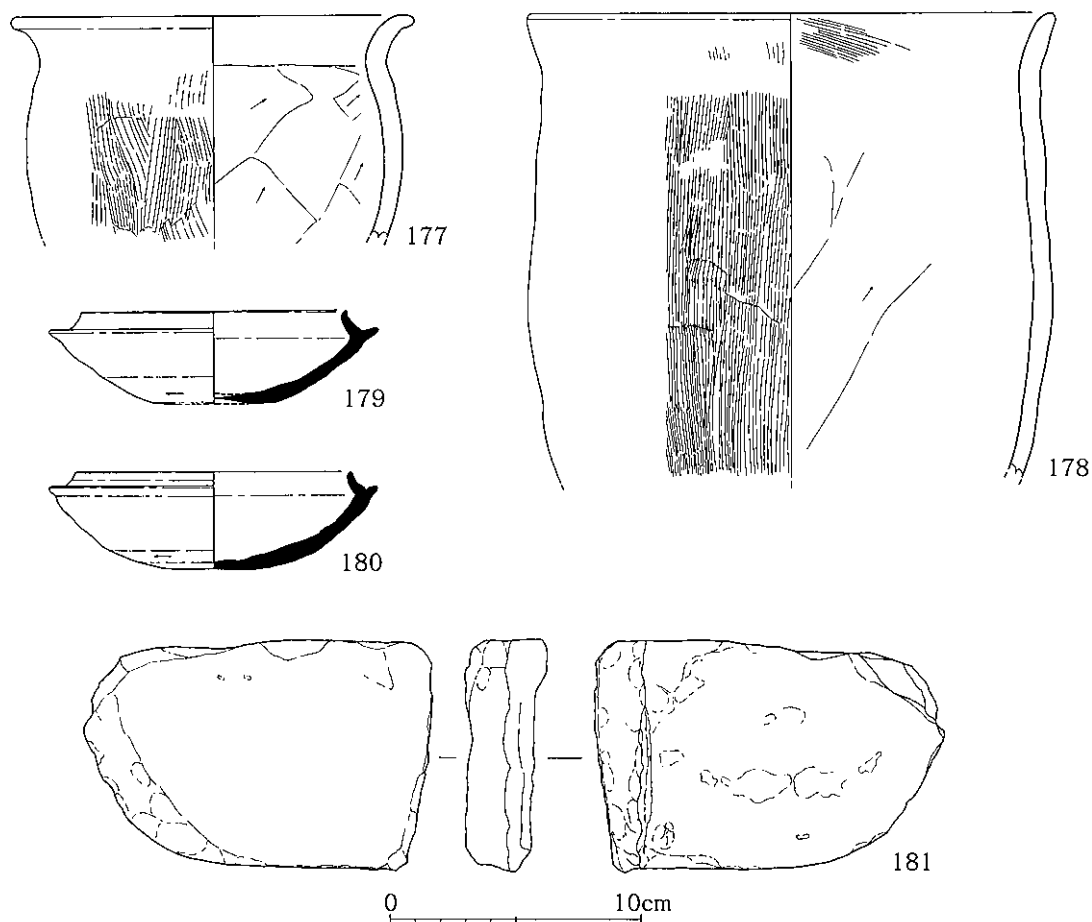
調査区をほぼ南北方向に縦断するような形で検出された。SDO1と切り合い関係にあり、新旧関係はSDO2の方が古い。一部明瞭でない部分もあるが2段掘りされており、幅は約1m～1.8m、深さはほぼ一定しており約50cmを測った。

出土遺物 (図版11、第35図)

弥生土器

高杯 (167・168)

ともに残存する杯部のみを図上復元した。167は復元口径22.1cm、内面と口縁部に丹塗りの痕跡がわずかに残る。168は復元口径26.3cm。内外面、口縁部に丹塗りの痕跡が残る。



第36図 ㊦4区 SDO3出土遺物実測図 (1/3)

壺 (169)

図上復元で口径26.4cmを測る。口縁部は内側へ小さく張り出し、上端面はほぼ水平になっている。風化がひどく調整は不明である。

甕 (170・171)

ともに口縁部の小破片である。170は断面が「く」字形で、内面には明瞭な稜をつくる。調整は風化のため不明。171は胴部外面に縦方向のハケ目が残るが、その他の部分の調整は不明。

器台 (172)

上部を欠き、残存高9.4cm、復元底径12.4cmを測る。外面は横もしくは斜め方向のハケ目、内面はナデと指オサエで調整している。

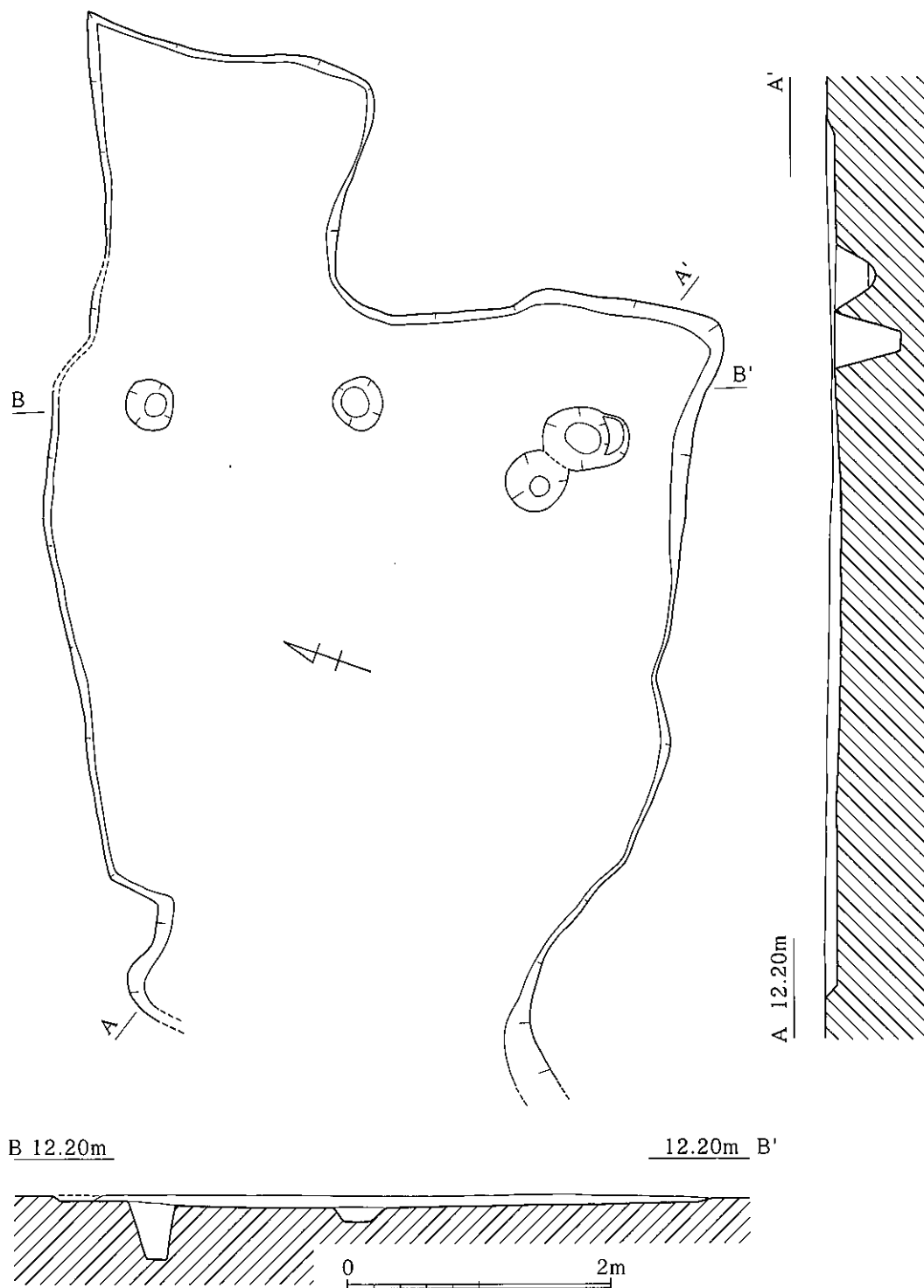
蓋 (173)

口径32.1cm、器高10.3cmを測る。調整は体部が内外面ともハケ目とナデ、天井部がナデと指オサエである。

土師器

甕 (174~176)

いずれも小破片である。174は外面が胴部、頸部ともに横方向のハケ目、頸部内面が斜め方向のハケ目、胴部内面が指オサエで調整している。175は胴部内外面にハケ目、176は胴部内面にヘラ

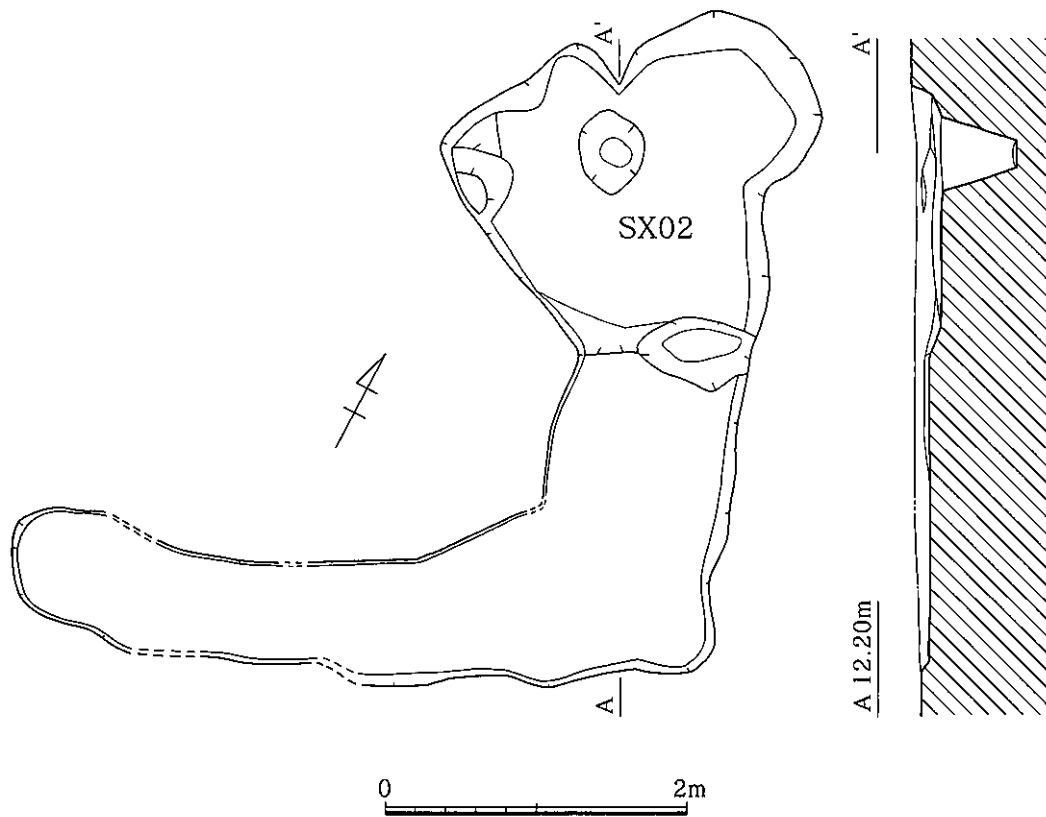


第37図 ⑤4区 SX01実測図 (1/50)

ケズリの痕跡が残る。

SDO3 (第25図)

調査区の南東端部で検出された。SDO1と切り合い関係にあり、新旧関係はSDO3の方が古い。SDO1の西側では検出することができなかったが、本来はより西へ伸びていたものと思われる。幅約90cm、深さ約50cmを測った。



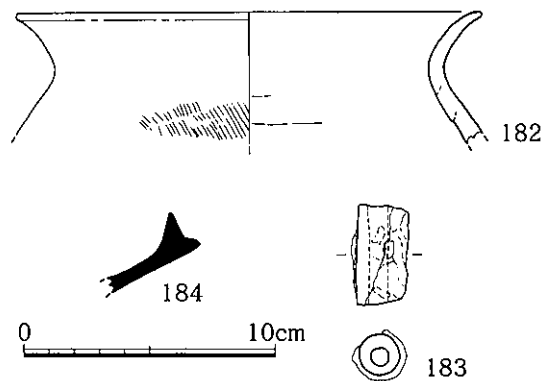
第38図 ㊦4区 SX02実測図 (1/50)

出土遺物 (第36図)

土師器

甕 (177・178)

いずれも底部を欠く。177は復元口径16cmを測り、調整は胴部外面が縦もしくは斜め方向のハケ目、胴部内面が斜め方向のヘラケズリ、口縁部は風化しており不明。178は復元口径21cmで、胴部外面縦方向のハケ目、口縁部内面斜め方向のハケ目、胴部内面にはわずかにヘラケズリの痕跡が残る。



第39図 ㊦4区 SX01出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

杯身 (179・180)

ともに図上復元した。179は口径10cm、受部径15.1cm、180は口径11cm、受部径13cmを測る。調整はいずれも底部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分に回転ナデを施す。

石器

用途不明石器 (181)

材質は砂岩。残存する限りで長さ13.8cm、幅9.2cmを測る。用途は不明であるが、明瞭な使用痕が残る。

㊦不整形土坑

SXO1 (第37図)

SBO1、SBO2のすぐ南に隣接するような形で検出された。SBO2と切り合い関係にあり、新旧関係はSXO1の方が新しい。西側壁を検出することができなかったが、東側壁の一部が突出するような形であると思われる。東西方向で最大長約7.5m、南北方向で最大長約5mを測った。深さは、最も残存状態の良い部分で約8cmであった。

出土遺物 (図版11、第39図)

土師器

甕 (182)

口縁部のみの小破片で、復元口径18.5cmを測る。調整は、胴部外面が斜め方向のハケ目、口縁部外面が回転ナデ、その他は不明である。頸部と胴部を接合した痕跡が内面に残る。

鉄製品

筒状鉄製品 (183)

筒状を呈し、残存する限りで長さ4cm、幅2.2cm、孔径0.7cm～1cmを測る。錘として用いられた可能性が考えられる。

SXO2 (第38図)

SEO1、SEO2の南側、約2mで検出された。北端がつぶれた逆し字のような平面プランを呈する。最大長は、東西方向、南北方向ともに約4.5mを測った。深さは、最も残存状態の良い部分で約25cmであった。

出土遺物 (第39図)

須恵器

杯身 (184)

小破片のため図上復元できない。調整は内外面とも回転ナデである。

Ⅲ ま と め

各遺構の時期について簡単に触れ、まとめとしたい。

1 ㊦ 2区

SB01 弥生時代中期後葉から末と考えられる。

SJ01 弥生時代中期前葉と考えられる。

SJ02 弥生時代中期中葉と考えられる。

SPO1～SPO4 いずれも甕棺墓より先行するもので、弥生時代前期後葉から中期初頭頃のものであろう。

弥生時代の墓地は、これまでの仲島遺跡の発掘調査では確認されたことがなく、㊦2区で墓域の位置をはじめて知ることができた。その意味では大きな成果であり、同時期の集落との関係が注目される。また、削平されたものを含めると、まだかなりの数があったものと思われる。

SD01 弥生時代中期後葉頃であろうか。

SD02 SD01に切られる。弥生時代中期後葉頃であろうか。

SD03 古墳時代後期（6世紀後葉から末頃）と考えられる。

SD04 古墳時代後期（6世紀末前後）と考えられる。

SD05 古墳時代後期（6世紀末前後）と考えられる。

SD13 これまでの調査結果同様、6世紀後半から末頃と考えられる。

SX01～SX03 出土遺物が少ないが、SD13との切り合い関係から、6世紀後半頃と考えられる。

2 ㊦ 4区

SB01 古墳時代後期（6世紀後半から末頃）と考えられる。

SB02 古墳時代後期と考えられるが、SB01、SB03との切り合い関係から、6世紀後半頃であろうか。

SB03 古墳時代後期（6世紀後半から末頃）と考えられる。

SB04 出土遺物が少ないが、全体の構造などからSB03とほぼ同時期であると考えられる。

SB05 出土遺物が少ないが、SB01との切り合い関係などから古墳時代後期（6世紀末頃）と考えられる。

SE01 弥生時代中期と考えられる。

SE02 古墳時代後期（6世紀末から7世紀初頭頃）と考えられる。

SE03 古墳時代後期（6世紀末から7世紀初頭頃）と考えられる。

SD01 古墳時代後期（6世紀後半から末頃）と考えられる。

SD02 弥生時代中期と考えられる。

SD03 弥生時代中期と考えられる。

S D O 1 弥生時代中期後葉頃であろうか。

S D O 2 S D O 1 に切られる。弥生時代中期後葉頃であろうか。

S D O 3 古墳時代後期（6世紀後葉から末頃）と考えられる。

S X O 1 出土遺物が少ないが、古墳時代後期（6世紀後半頃）であろうか。

S X O 2 これも出土遺物が少ないが、古墳時代後期（6世紀末頃）であろうか。

参考文献

- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅳ』（大野城市文化財調査報告書第12集 1984)
- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅴ』（大野城市文化財調査報告書第17集 1986)
- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅵ』（大野城市文化財調査報告書第20集 1987)
- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅶ』（大野城市文化財調査報告書第24集 1988)
- 大野城市教育委員会『森園遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第26集 1988)
- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅷ』（大野城市文化財調査報告書第27集 1989)
- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅹ』（大野城市文化財調査報告書第34集 1992)
- 大野城市教育委員会『仲島遺跡Ⅺ』（大野城市文化財調査報告書第37集 1993)
- 大野城市教育委員会『森園遺跡Ⅱ』（大野城市文化財調査報告書第55集 1999)

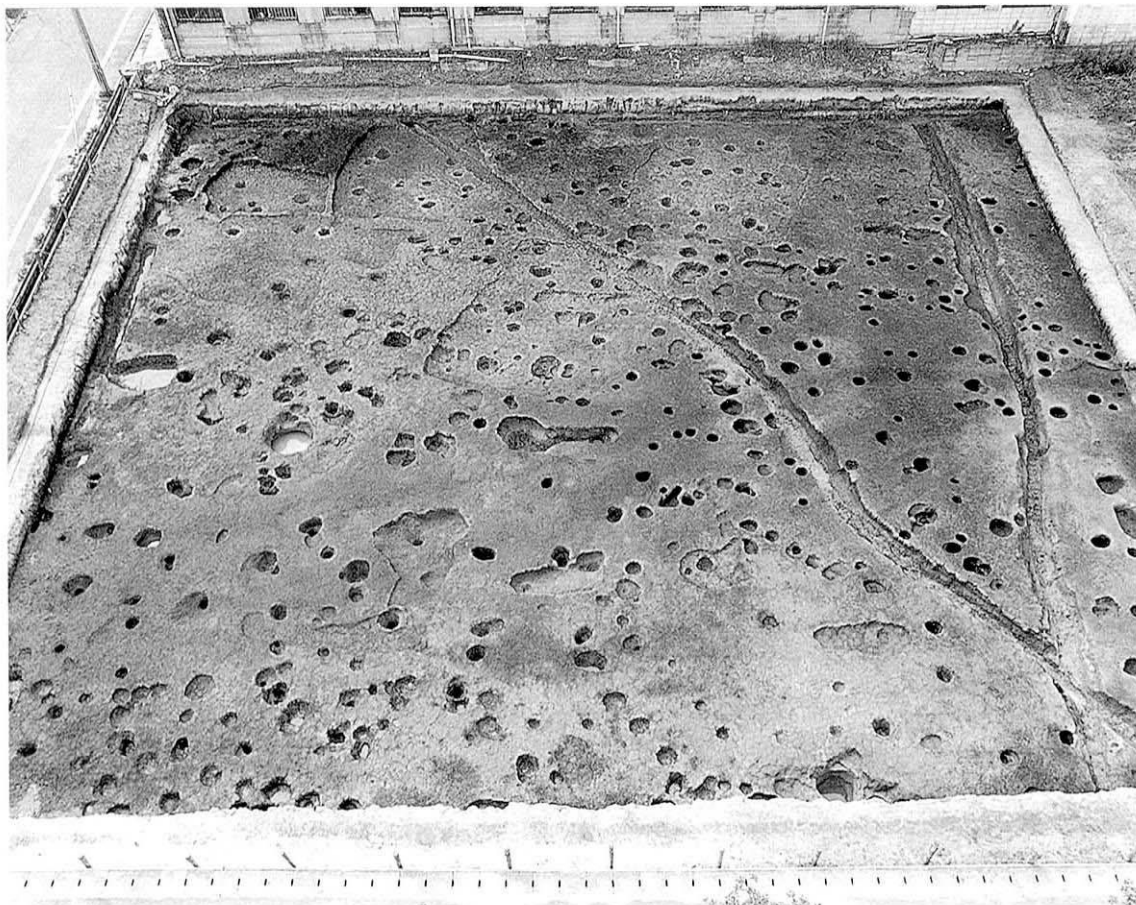
圖 版



(1) ㊦2区全景 (南から)



(2) ㊦2区全景 (東から)



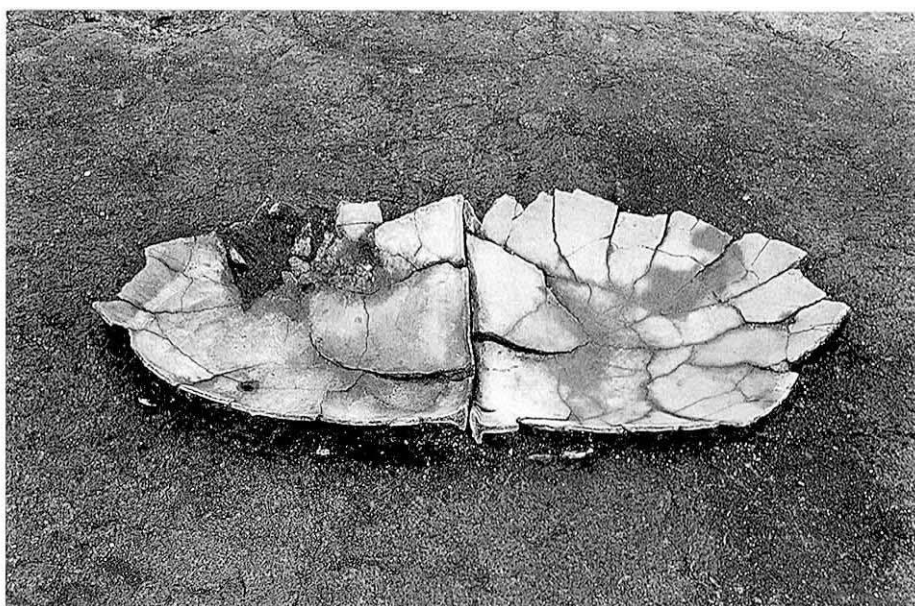
(1) ㊦4区全景（南から）



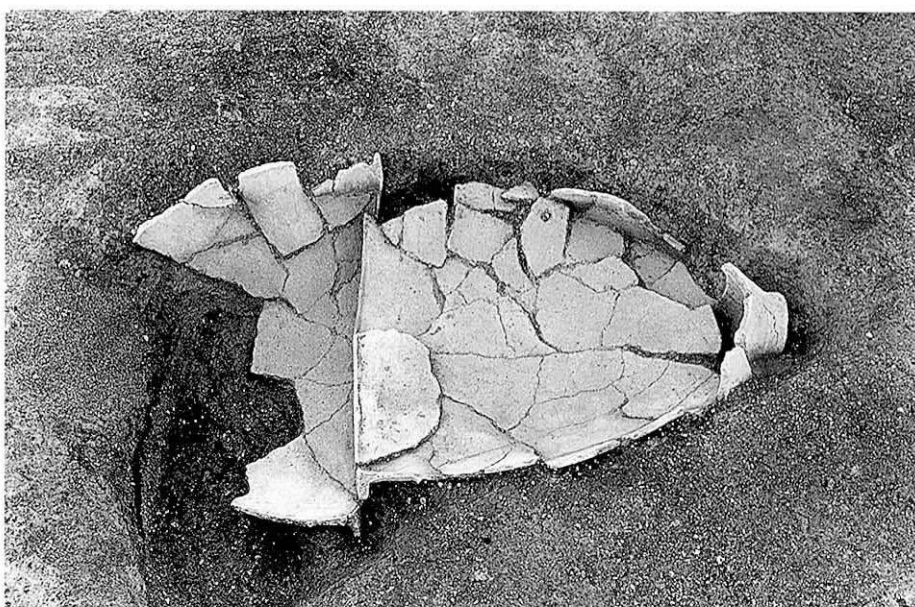
(2) ㊦4区全景（西から）



(1) ⑤⑤2区 SB01



(2) ⑤⑤2区 SJ01



(3) ⑤⑤2区 SJ02



(1) ⑤⑤2区 SP01



(2) ⑤⑤2区 SP02



(3) ⑤⑤2区 SP03

(1) ㊦2区 SP04



(2) ㊦4区 SB01、
SB02、SB05

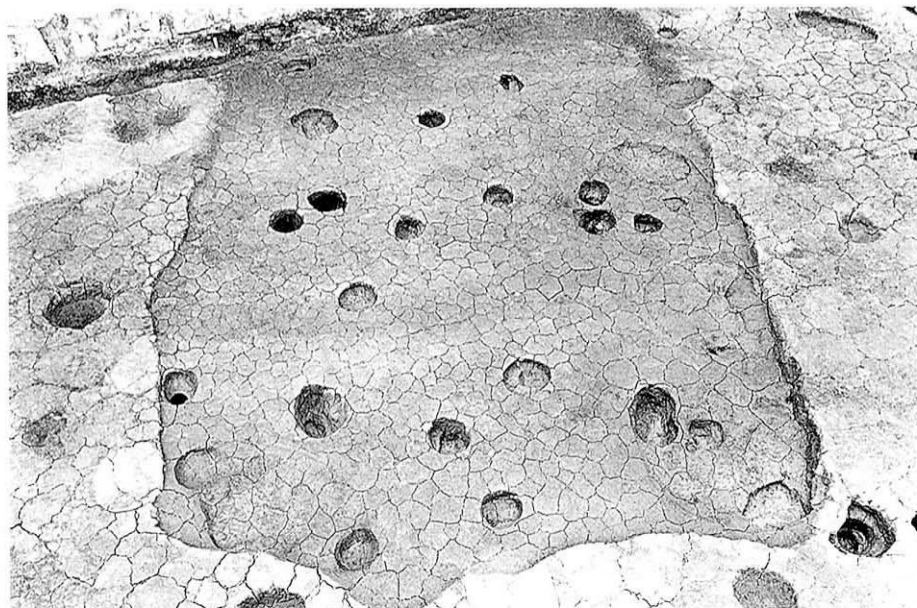


(3) ㊦4区 SB01





(1) ⑤⑤4区 SB03



(2) ⑤⑤4区 SB04



(3) ⑤⑤4区 SE01

(1) ⑤⑤4区 SE02



(2) ⑤⑤4区 SE03





5



57



6



62



8



63



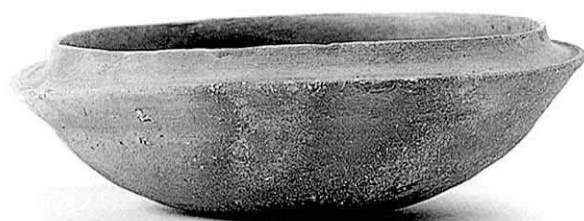
64



82



83



85



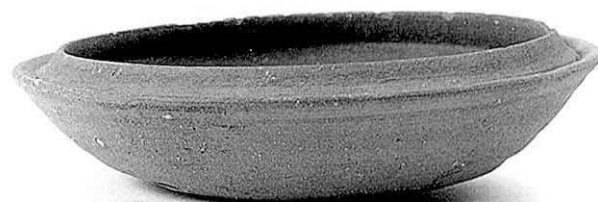
74



87



75



90



77



92



79



96



113



99



124



107



125



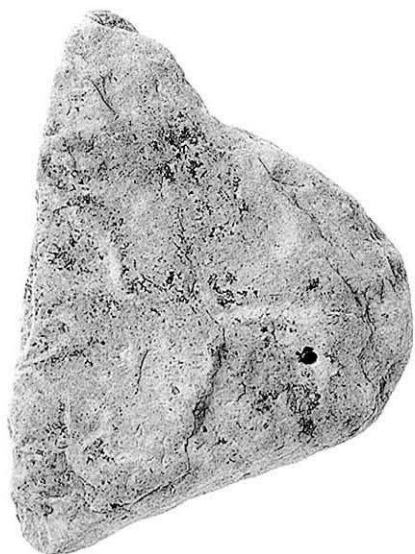
135



111



140



141



166



142



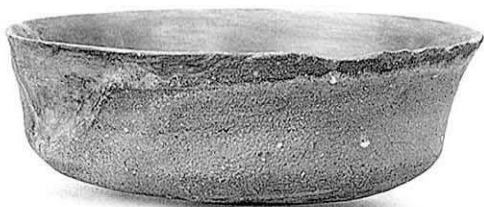
173



145



183



153



164

報告書抄録

ふりがな	なかしまいせき							
書名	仲島遺跡XII							
副書名	福岡県大野城市仲畑所在遺跡調査報告							
巻次	12							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第71集							
編著者名	徳本 洋一							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	㊦816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 ☎092(501)2211							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
なかしまいせき 仲島遺跡㊥ 2区	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 なかはた 仲畑			33° 33' 04"	130° 28' 16"	1991.11.5) 1992.1.31	約800m ²	個人住宅建設
なかしまいせき 仲島遺跡㊥ 4区	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 なかはた 仲畑			33° 33' 04"	130° 28' 12"	1992.4.7) 1992.7.7	約1000m ²	個人住宅建設
所収遺跡名	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
仲島遺跡㊥ 2区	集落 墓地	弥生～古墳		甕棺墓 木棺墓 土壇墓 竪穴住居跡 溝		弥生土器 土師器 須恵器		
仲島遺跡㊥ 4区	集落	弥生～古墳		竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸 溝		弥生土器 土師器 須恵器		

大野城市文化財調査報告書 第71集

仲島遺跡XII

平成18年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 株式会社 三光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1